
三千世界の女神

灰色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三千世界の女神

【Nコード】

N3090R

【作者名】

灰色

【あらすじ】

テンカワ・アキトは夢の中でミスマル・ユリカと出会った後に、何故か過去の佐世保へとジャンプしていた。

状況を把握する為にアキトはある場所へと向かうのだが…。

第01話 過去では無い過去へ

それが夢であるのか、それとも現なのか。

テンカワ・アキトは暗い空間で浮いていた。

あるいは落下しているのかもしれないし、あるいは上昇しているのかも知れないが、彼にはそんな事はどうでも良かった。

彼の最愛の人であり、妻のユリカが居るのだから。

「ユリカ…。」

彼は彼の妻にそう声をかける。

「ごめんね、アキト。」

ユリカはアキトに涙を流しながら、そう声をかける。

「俺こそ、お前を長い間助けだす事が出来なくて…。」

「いいの、それはねアキト、決まっていた事なの。」

ユリカはアキトが話すのを制すると、静かに首を横に振る。

「ミスマル・ユリカが演算ユニットに取り込まれるのは、運命…うん、既定事項なの。」

だからね、私が攫われたのは言わば流れみたいなもののよ、アキトはそれに巻き込まれただけ。」

「それは、どういう事だ？」

ユリカの話に、アキトは首を傾げる。

「演算ユニットは破壊出来ない、演算ユニットは移動できない。全ての因果を捻じ曲げて、火星南極冠のあの場所に必ず存在する。そして必ずその因果には、ミスマル・ユリカというファクターが関わるの。」

全ての並行時空を貫くメインシャフトとなり、無限の並行世界を繋ぐ事により無限の演算処理能力を手に入れた演算ユニット。

あの演算ユニット『アマテラス』は、私じゃ無いミスマル・ユリカが作った並行世界観測装置の核にして要であり、『ミスマル・ユリカ』自身でもあるのよ。

…まあ、私も正確には貴方が知っているミスマル・ユリカじゃ無いんだけどね、彼女は私の構成の一つに過ぎないし。」

「…い、イネスさんが感染ったのか、ユリカ？」

アキトには何の事やらさっぱりだ。

そしてシリアスな空気もぶっ壊れた。

「もう、折角のシリアス破壊しないでよ、プンプンだよアキト！つまりね、アキトが何をしようが私は攫われて遺跡と融合させられていたって事なの。」

アキトが申し訳なく思ったりする事は無い…むしろ巻き込んだのは『私』なのよ。」

一瞬昔のような天真爛漫な表情になったものの、ユリカは再びつらそうな表情に戻る。

「そんな事は無い！そんな！」

「…もう、アキトは人の話を聞かないなあ。」

「お前が言っな、お前が!？」

思わずアキトはツツコンでしまっ。

「兎に角ね、アキトがこんな事になる必然性は無かったの。
分かっているでしょ、アキトは今、自分がどんな状態か。」

「俺は…もうすぐ死ぬんだろう?」

アキトの問いに、ユリカはコクリと頷いた。

アキトの体はナノマシンの暴走によって常に蝕まれ続けており、それは既に限界に来ている。

死がその身に訪れるのは時間の問題だと、アキトの体を定期的に検査しているイネスからも告げられていた。

「死ぬわ、でも私がそうはさせない。

私のせいでアキトが死ぬだなんて、そんな世界はイヤ。」

そう言うユリカの体がナノマシンによって白く発行し、体中に幾何学模様状の線が走る。

同時にアキトの体のナノマシンも発光を始めた。

「何を…。」

「勿論、アキトが失ったものを取り戻して貰うの。
そして…。」

ユリカは微笑みを浮かべて涙を流し、一言呟くように言葉を続けた。

「ばいばい。」

「な、ま…！？」

光に包まれ、アキトは意識を失ったのだった。

「う…ん？」

匂いという、とても懐かしい感覚でアキトは目を覚ました。

「何故、匂いが…ラピスのサポートが無ければ、既に視力もままならなかったというのに。」

そして、目を開けて更に驚愕する。

「視力も回復している、聴力も、触覚も…どういう事だ？」

そう言いながらも、アキトは夢でユリカが言っていた事を思い出した。

ユリカはアキトが失うものを取り戻すと言った、そして…。

「ばいばい…って、どういう事だ？」

涙を流しながら微笑むユリカを思い出し、アキトは首を傾げる。

ユリカは遺跡の演算ユニットと同化していたにもかかわらず、アキトと違って何の後遺障害も無かった。

むしろ体細胞もろもろがリフレッシュされており、肉体年齢は18歳相当に若返っていると診断されていたくらいなのだ。

「そもそもここは…サセボ、か？」

アキトにとってはかなり見慣れた光景。

月からボソソジャンプした際に辿り着いたのがここ、サセボであった。

アキトは周囲を見回し、そしておかしなモノを見つける。

そこにあっただのは《連合宇宙軍に入隊して、君も木星蜥蜴をやっつけよう！》というスローガンがイラストとともに描かれている看板…それは、前大戦時には地球上の何処でも見られた看板だが、大戦終結後は木連への差別表現が使用されている事、また連合宇宙軍自体が統合軍の発足によって急激に弱体化した事などもあり、ド田舎の忘れ去られたような場所ならば兎に角サセボクラスの都市では既に撤去されている類の代物だったのだ。

「どついう事だ…？」

アキトにとって先程から首を傾げる事ばかりだ。

彼の脳裏には以前も体験したとある出来事が浮かんでいたが、それは干渉し得る過去の時点に於いては起こり得ないとイネスに言われていたのだから。

すなわち《過去に観測し得た地点には戻れない》という事。

実際、昔時間を一週間遡上してしまった時には、ナニカが物理法則に働きかけ彼が月に存在する情報を完全に隠蔽していた。

過去に観測し得た地点には戻れないという事は、つまり己がミクロ・若しくはマクロに関わる過去に干渉する事は出来ないという事なの

だ。

干渉しようとしても、因果が決定してしまっている為、全ての過去へ干渉する行為は無かった事として辻褄を合わされてしまう。

無かった事に出来なかった場合は、そもそもそこに存在出来ないとも言われていた。

「此処があゝの戦争の時代だとして、俺が一切干渉せずにいられるわけが無い…。」

そう、アキトが干渉せずにこの時代でじっとしているなど、絶対に無理なのだ。

いやアキトに限らず、過去に戻れてやり直せるのならば、その誘惑に勝てる人間など居るわけが無いのだから。

「どういう事だ…?」

だから、アキトはまたこの問いに戻る。

これはどういう事なのだと。

ユリカの言った別れの言葉も気になれば、目が覚めた後のこの状況もわけがわからない。

「迷っていても仕方が無い…か。」

アキトは立ち上がり歩き出した。

取り敢えず、状況を把握しつつあそこに向かってみようと思いがながら。

「らっしやい！」

アキトが店に入ると、店主の威勢のいい声が店内に響く。

「懐かしいな。」

そこは雪谷食堂。

蜥蜴戦争の際に才人が何度かお世話になった場所である。

何事も無くすんなり来れてしまった事に拍子抜けしつつ、アキトは椅子に腰かける。

サイゾウの先ほどの様子を見るに、まだ自分とは出会う前なのだろうと思いつながら店の中を見回すと、雪谷食堂の常連達の姿もある。勿論アキトに対する反応は一切無し。そんな風景に少々寂しさを覚える。

「いらっしやいませ、何にいたしますか？」

癖の無い黒髪の少女が、エプロン姿で注文を取りに来た。その顔にアキトはいいような違和感を覚えた。

一見して可愛い娘なのだが、何処かで見た事があるのだ。見た事はあるのだが、その人が全く誰かがわからない。

単なるデジャヴかとも思ったが、デジャヴにしては違和感が酷い。

「お客様？」

「あー…うん、じゃあ炒飯で。」

それと、春巻。」

自分を見つめて考え込む彼に、首を傾げて怪訝な表情を浮かべる少女を見て、アキトは慌てて注文した。

「はい、炒飯と春巻ですね。

サイゾウさん、炒飯と春巻ですっ！」

「おうつ！」

中華鍋を振るいながら威勢良く返事をしたサイゾウの声を聞き、アキトは目を細めた。

「アカネちゃん、可愛いなあ。

俺っちに嫁さんが居なきゃアタックするんだが。」

「馬鹿野郎、嫁さんが居なくてもおめえなんぞにチャンスはねえよ。」

少女を眺めてうつとりしている近所の男の言葉で、少女の名前がアカネだという事が判明したが、アキトにはやはり覚えが無い。

「…やっぱり、デジャヴなのか？」

思わずそう口に出して首を傾げつつ、アキトは料理が出て来るのを待つ。

待つついでに、先程の男達に声をかけた。

「あの娘、アカネっていうのか？」

「何でえ、あんたもあの娘狙いか？」

そう、あの子の名前はアカネちゃん。」

そう言う男の続く言葉に、才人は驚愕する。

「テンカワ・アカネって名前だよ。」

「テンカワあッ!？」

アキトは思わず立ち上がってしまった。

「ど…どうしたんだ兄ちゃん？」

いやまあ、確かにテンカワってそこそこ珍しい名字だろうけどよ。

「

「え? いやまあ、俺と同じ名字って滅多に居ないんで、びっくりしたんだよ。」

何せ、奈良県の村がルーツの名字である…とは言え、アキトがびっくりしたのはそういう話では無い。

テンカワ・アカネという名を聞いて、アキトがアカネに対して抱いていた違和感の正体はつきりした。

アキトは火星で無くしたアルバムで何度も見た母親の面影が、アカネという少女にかなり色濃く出ている事に気付いたのだった。

(過去で、俺と同じ苗字の娘がたまたま偶然働いているだと? しかも、うる覚えだが母さんに似ている?)

そう考えていた時、町中にサイレンの音が響いた。

「おー…またか。」

「よくやるもんだ。」

男たちは窓から外を覗く。

アキトもそれに倣って窓から見える空を見ると、バツタと思しき影と連合空軍の戦闘機がドッグファイトを繰り返していた。

町中にはサイレンが鳴り響いているが、逃げる者は居ない。

何故ならば現在定期的に飛来しているバツタは偵察機であり、民間人と民間人が居住している地域には攻撃を仕掛けてきたりしないからである。

初めは怯えていた住民たちも慣れっこになってしまい、今では誰も非難しない。

「いやあああああああつ!?!」

ガシャンという音と悲鳴に振り返ってみると、アカネと呼ばれた少女が両肩を抱きしめるかのように腕を組み、へたり込んでガタガタと震えているのだった。

「あー…あの娘、手の甲のタトウを見るに、元パイロットなんだろうな。」

戦場でよほど怖い目にあつたに違いねえ、可哀想に。」

「おいアカネちゃん、大丈夫かい?」

そんなアカネに男たちは同情的な視線を向け、サイゾウも彼女をいたわるかのように声をかける。

この時代に於いて戦闘機などを操縦する為には、ナノマシンの投与によるダイレクトリックが必須とされている。

投与されたものにはタトウと呼ばれるナノマシンの副脳コロニーが手の甲に形成され、これが脳内に形成された副脳コロニーとリンクして掌から機械に意思を伝えるというシステムになっている。

火星ではこれでも何でも操縦する為にわりと誰でもこのタトウがあつ

たのだが、地球では初期型ナノマシンでの副脳コロンの形成位置の不具合によって精神障害が続発した事件による偏見が残っており、タトウがある人は連合軍のパイロットというのが一般的な認識となっているのだ。

（…俺の時と随分扱い違うなオイ。）

アキトの時は思いきり馬鹿にされていたが、怖がる女の子をぞんざいに扱うような男は滅多に居ない。
可愛い娘ならば尚更。

それはわかるが、それでも感じる世の理不尽さ不平等さに心の中でこっそりと嘆くアキトなのだった。

（過去に戻っても何の干渉も無い世界、雪谷食堂、そこで働いている俺と同じ名字の女の子、そしてそのこの手の甲にはタトウ、木星兵器に対するPTSD…。

はっはっは、何だかよくわからんがそういう事かよバカヤロー！）

性別こそ違うが、それは間違い無くこの世界におけるアキトだった。そりゃあ干渉されるわけがない、限りなく同一人物に近い赤の他人なのだから。

この世界はアキトによって観測されていない、よく似た事なる世界という事になる。

「…俺が女の子の時間軸があるとか、誰得だよ？」

アキトはぼそつと愚痴り溜息を吐いてから、炒飯を食べるのを再開した。

もう既にサイゾウ達がアカネを介抱しているし、女の子とは言え自分と同じポジションにある人間に近づくのは微妙に避けたい気分だ

った。

「だ、大丈夫です…ああもう、何でこんな…情けないなあ。」

何とか立ち直ったのか、アカネは立ち上がってポリポリと頬を掻いている。

「元気出せよアカネちゃん、あんたならいつかきつとパイロットに戻れるって！」

「え？あの、何度も言いますが、私パイロットじゃ…。」

アカネは慌てて訂正しようとしているが…。

「よしんばパイロットに戻なくても、俺っちが嫁に貰ってやるよ。」

「莫迦野郎、おめえみたいな不細工じゃ無くても、アカネちゃんなら幾らでも良い男が出来るだろうが！」

「あ、あのですね、だから私パイロットじゃ無くて…。」

パイロットじゃあないというのだけは、やはり何故だか欠片も信じて貰えないらしい。

宇宙軍士官学校もある基地の町であるが故に、タトウを持つ人間はすなわち軍人という風に概念が固定されているのだろう。

「そもそもだ、アカネちゃんには彼氏が居るだろうに、あの士官学校生のでっかい奴。」

それを聞いて、アキトは思わず炒飯に顔をつっ込む所だった。

（か、彼氏だとう！？）

「はう！？いや、コウ兄ちゃんは彼氏とかじゃなくて、幼馴染ですからね！？」

あと私パイロットじゃないですから！」

少しだけ頬を赤くして、アカネはプンスカ怒っていた。
勿論、パイロットでは無いという主張はやめない。

（しかも、幼馴染って、幼馴染ってどういう事だ！？
まさか俺だけじゃ無く、こっちのユリカも性別が逆！？）

そりやもう、バイバイと言われるわけである。

アキトは自分が恐らく、ユリカとは二度と会えない世界に飛ばされたのだという事に気付いた。

「ははは…もう、どうにでもなれ」

はむ…うん、やっぱり美味しいなあ、ここの春巻。」

外はパリパリで中にはたっぷりスープを吸い込んだ春雨が詰まった絶品な春巻に、アキトの意識は現実逃避を始めた。

雪谷食堂の春巻は1人前で5本とボリュームたっぷり、しかも美味しい。

「ごちそうさまでした…お勘定お願いします。」

「はい。」

アキトは勘定を済ませて店を出ようとしたのだが…。

「あの…このお財布、一銭も入って居ないんですけど？」

「えっ!？」

怪訝そうなアカネの声…この時代、現金は全て電子化されており、財布はカードに変化していた。

「そもそもこれ、銀行とアクセス出来ないんですけど…？」

「ええと、その…。」

狼狽しきった表情で、アキトはきょろきょろと目を泳がせる
よく考えたら過去な上に異世界なのでアキトの口座は存在せず、故
にカードによる支払いも不可能だったのだ。

「食い逃げ…ですか？」

訝しげなアカネの視線が、アキトの心を抉る。

「い、いや、違う。」

これにはわけが…。」

そんなわけでテンカワ・アキトは、並行世界についた途端に今まで
経験した事のない未曾有の窮地に追い込まれたのだった。

アキトの明日はどっちだ!？

第01話 過去では無い過去へ（後書き）

えーと、普段は某サイトでゼロの使い魔のSSとかを書いている灰色と申します。

何をトチ狂ったか、新連載ですよ、新連載。

こちらはあちらの気晴らしに書くつもりですので、あちらよりも更新ペースはスローになる筈ですが、頑張って書き切る予定ですのでどうか宜しくお願い致します。

第02話 神妙不可思議にして胡散臭い男？

かつて黒尽くめの機動兵器ブラックサレナを操り太陽系を震え上がらせた男、テンカワ・アキト。

その男は今、サセボの食堂で食い逃げした容疑で震え上がっていた。

「…食い逃げとか、私と同じ年くらいな癖して何やっているんですか？」

アカネの冷たい視線が、アキトに突き刺さる。

先程確認したのだが、確かにアキトの容姿は18歳レベルまで若返っていたのだった。

恐らくはあのユリカの仕業なのだろう。

「すいません、本当にすいません！」

まさか財布が銀行とリンクしていないだなんて思わなくて！

働いて返しますので、警察だけはどうか平に平にご容赦を！」

アキトは土下座して必死に懇願した。

銀行口座が存在しない、そのうえこの世界におけるアキト相当の人物は女性。

わかりやすく言うと、アキトはこの世界には存在しない人間なのだ。この時代、生まれた時に住民登録する際にDNAも一緒に登録する国が多い。

ここ日本もそんな国の一つであり、入国する外国人にもDNAデータの登録を義務付けている。

ゆえに、この国でDNAデータが存在しない人間というのは密入国か何か、本来存在しない筈の人間だという事になる。

ましてや現在は戦時下であり、変な勘繰りを受けたら誤解を解くの

に相当な苦労が必要になるのは想像に難くないのだ。
下手すりゃ木連の関係者と勘違いされて、連合宇宙軍情報局に引き渡されたりしかねない。

「食い逃げする人はそう言っつて、二度と帰って来ないんですよ…。」

「いや、こう見えても俺、元料理人なんス！

皿洗い掃除雑用、何でもしますので、食い逃げで警察だけはどうか勘弁して下さい！」

そもそも、アキトに食い逃げなんかする気は全く無いというか、元料理人の矜持として食い逃げだけは選択肢として絶対なかった。
むしろ食い逃げ犯はアキトの仇敵である…今はほぼ食い逃げ犯そのものだが。

「うーん…どうしますか、サイゾウさん？」

アカネはずーっと黙ってアキトを見ていたサイゾウに話を振る。

「見たところアカネちゃんと歳はそんなに変わらねえみたいだが、お前さん料理できるのか？」

「あ、はい、まだまだ半人前っスけど。」

サイゾウの問いに、アキトはコクリと頷いた。

「料理人の癖に食い逃げ…。」

「だから、食い逃げするつもりなんて無かったんだってば！」

ジトーつとアキトを見るアカネに、弁解する。

「作ってみる。」

「へ？」

「味見して、それから考えてやらんでもない。」

サイゾウはそう言いながら、厨房を指差した。
きちんとしたものが作れば、働いて返すという事でも良いと言っているらしい。

「ちょ、ちょっとサイゾウさん、良いんですかこんな人に？」

「駄目なら、突き出しゃ良い。」

ちよつと慌てたアカネの問いに、サイゾウはにやりと笑って頷いたのだった。

アキトは久々に中華鍋を振るっている。

ナノマシンの大量投与で五感を失ってからだから、何年ぶりになるだろう。

鈍りきった勘を戦闘で培った集中力で補いつつ、アキトは中華の基本である炒飯を作っていた。

「ほう、鍋の振り方が意外と様になっていやる。」

その姿を楽しそうに眺めるサイゾウ。

「ギギギ、食い逃げの癖に…。」

まだ中華鍋を上手く振る事が出来ないらしく、アカネは悔しそうにそれを見ている。

「出来ました！」

作ったのは細切れチャーシューと長ネギが入った、極々普通の炒飯。具のバランスと調味料による味付けは、屋台を引いていた頃のオリジナルに限りなく近づけてある。

「ほう…見てくれは問題ねえな、味は…と。」

「…ゴクリ。」

サイゾウが炒飯を口に運ぶのを見て、アキトは思わず緊張で喉を鳴らした。

「ふう…お前さん、最近サボっていたな？」

「え？ええ、サボっていたというか、厨房に立つ事が出来ない状態でした。」

アキトは表情を暗くして頷く。

味覚も嗅覚も殆ど失っていた為に、まともに料理を作る事も覚束なかったのだから仕方がないとはいえ、それを指摘されるとやはり気分が落ち込むのだろう。

「じゃあ駄目ですね、警察に突き出しましょう!」

アカネはそう言って携帯電話を取り出したが…。

「まあ待ちなアカネちゃん、食ってみる。」

「え? 私ですか?」

アカネは自分を指して目を丸くする。

自分も試食することになるとは思っていなかったらしい。

「ああ、食ってみる。」

「わかりました…もぐ…もぐ…腹立つなあ、普通に美味しいじゃない。」

釈然としない表情ながらも、アカネは美味しいと評価する。

「なんで、食い逃げさんがこんな美味しいものを作れるのかしら?」

「だから、食い逃げじゃあないって。」

サセボで生活をしていると、思い込みが激しくなるのだろうかと思いつつ、アキトは訂正した。

「ボケちゃあいるが、元は悪くねえな、お前さん。」

この程度なら、鍛えりゃ元に戻るだろ…腕が元に戻るまでこき使つてやるから、覚悟しとけよ。」

「え…あ、はい!ありがとうございます!」

アキトは、サイゾウに深々と頭を下げた。

「…ところでお前さん、名前は何ていうんだ？
まさか食い逃げ太郎って名前じゃあねえだろ。」

「お金も無しに食べ物屋に来るような人は、食い逃げ太郎で十分です。」

「食い逃げ太郎…。」

アカネのつつけんどんな態度に、アキトは勘弁してくれと思いながら肩を落とす。

「俺の名前は、テンカワ・アキトです。
歳は…21歳です。」

アキトはそう言いながら『天河 明人』と、メモ帳に書いた。

「ほう、童顔だな。」

「放っておいてください。」

サイゾウの評価に、外見年齢18歳だから歳よりも若干幼く見えるかもしれないなどか思いながら、アキトは言った。

「何なのよ、その偽ブランドみたいな名前は？」

アカネはそう言いながら自分の名前をメモ帳に書き、ぱんつと音を立ててテーブルに置く。

そこには『天河 明音』と書いてあった。

アキトはそれを見て、自分の親のネーミングセンスを理解する。

(…こりゃたぶん、他の並行世界にアキラとかアキヒコとか、アケミとかアキコとかも居るな、間違い無く)

「私と一文字違いって何、何なの？」

偶然にしちゃ出来過ぎでしょ。

本名を答えなさいよ、本名を。」

「そんな事言ったって、これが本名なんだよ。」

アカネの言葉に対して『自分が聴いたときも信じられなかったし、予備知識も無いんじゃないやあ尚更だよなあ…』と妙に内心同意しつつも、アキトは返す。

「アキトが？」

「そう、アキトが。」

アカネの問いに、アキトはこくりと頷く。

「…テンカワって苗字は？」

「奈良県の村だろ、ルーツ。」

「…よく調べたわね。」

「ふっ…ちょっとした中二病ってやつだ。」

居そうで意外と居ない珍しい苗字なので、調べたのが高校生の時だったのをアキトは思い出していた。

「私も調べたことあるのよね、実は……しゃー無いわね、百歩譲ってあんたがテンカワ・アキトっていう名前だって認めたげるわ。」

アキトって呼ぶわよ、テンカワさんって呼ぶのむず痒いから。」

「ああ、俺もアカネちゃんって呼ぶから、理由は以下同文につき省略。」

同姓の人を姓で呼ぶというのは物凄くむず痒いと、その昔同級生のスズキが言っていたのを二人は思い出していた。

「ちゃん付け……。」

「いや良いだろ、他の人もそう呼んでいるんだし。」

不服そうなアカネに、アキトは少々戸惑ったような表情を浮かべる。

「同じ年に見える男にちゃん付け呼ばわりされるって言うのは、何かねー。」

「だから、俺は21歳だって言っているだろうが、年上だよ!」

「食い逃げ未遂だけどね。」

「……………」。

最初の印象が悪かったせいか、アカネにはアキトが同等以下に見えるらしい。

「兎に角、ちゃん付け禁止。」

「じゃあ、アカネ。」

アキトがそう言うが、やはりアカネの表情は晴れない。

どうやら同等以下ではなく、自分よりも目下に見ているようだ…酷い話である。

「うーん…まあ、年上ならさん付けで呼ばせるのもアレよね。

よし、許す。」

「…そりゃどーも。」

渋々納得した様子のアカネに、アキトはホッと溜息を吐き肩を下ろす。

冷酷非情な謎のテロリストから、食い逃げ未遂犯、仕舞いにはバイトの女の子に見下されるという物凄い転落振りだが、これもアキトらしいといえばアキトらしいのかも知れない。

「よし、話はまとまったな？

早速だがアキト、働け。」

サイゾウが指差した先には、昼の飯時が終わった後の大量の洗物が洗い場に満載されている光景があった。

「うっす！」

アキトはそれに気合を入れて頷いたのだった。

「アキト、蕪玉炒め定食と中華丼、天津丼、エビチリ一丁!」

「おうさ!アカネ、火星丼出来たから持って行って!」

「オツケー。」

その夜の夕食時、アキトは皿洗いをしつつサイゾウの手が開かない所の助っ人をやっていた。

「サイゾウさん、新しい料理人入れたのか…ってか、何でアカネちゃんと名前呼び捨て会ってんだよ、彼氏?」

「テンカワ・アキトっていうらしいぜ、アカネちゃんの親戚なんじゃない?」

客が新しく入って来たアキトの姿を珍しそうに見ている。

「情報早いなお前、誰に聞いたんだ?」

「いや、さっきアンマン食いに寄った時にな、アカネちゃんに聞いた。」

「…お前、一体一日何食するつもりなんだよ?」

矢鱈と雪谷食堂に寄っている客に、もう一人の客が呆れた視線を送

る。

「だって、今日はせつかくの土曜日だぜ？」

アカネちゃんが昼から居るのって土日祝日だけなんだから、そりゃあ寄るしか。」

「…お前、将来ストーカーとかで新聞に載らないように気をつけろよ？」

そんな事を話している客の所に、アカネが料理を持ってやって来る。

「はい、新メニューの火星丼（本場）です！」

でもお客さん、本場の火星丼が食べたいだなんて、物好きですね」？」

本場の火星丼、それは合成蛋白質を使った肉のイミテーションや、野菜に見えるが実は遺伝子改造によって作られた海藻という偽野菜を使った具を、海水で生育可能なようにこれまた遺伝子改造された米を盛った上に乗つけた丼だ。

味は期待しない方が良いが、不味い飯が好きな物好きにとっては不味過ぎなくてがっかりという、それはそれは中途半端な味である。

火星ではまだまだ陸地の土壌に栄養分やミネラル分などが不足している為に、それらが溶け込みやすい海で様々なものを生産しているのだ。

陸地にも畑はあるが、こちらは土地が痩せているとか言うレベルじゃあ無い為、海のものに輪をかけて美味しくない上に、上手く成熟しないものまでであるというそれはそれは酷い状況である。

「火星の基地で働いていた事があってね、あの美味くも無ければ大して不味くも無い味を再現したというなら、是非とも食ってみたい

なあと。」

「あ、火星で働いていらつしゃった事があるんですか？
どちらでした？」

「どうやら、二人ともサセボ基地の軍人らしい。」

「ああ、俺はエリシウム島基地所属だったんだよ。
火星名物、合成蛋白肉と海藻野菜と海米が飯の基本でね。
毎日美味くは無いが不味過ぎ無い飯というのにすっかり参っ
て、たまに地球から届く肉や野菜に大喜びしたものだ。」

「そうそう、美味しくないんですよ…でも、食欲が失せるくら
い美味しくないわけじゃないっていう、絶妙な不味さですよ。」

アカネは同意するようにコクコク頷いている。

「お、アカネちゃんも火星に行った事あるのかい？」

「行ったというか、火星出身です。」

私、ユートピア・コロニー生まれの火星人ですよ。」

アカネの言葉を聞いて、二人の軍人は気まずそうな表情を浮かべた。

「火星出身だったのか…。」

「気にしないでください、火星の人達は…必ず何処かで生きている
筈です。」

いくら木星蜥蜴だって、あの広い火星全土を隈なく探し切るのは
無理ですよ。」

アカネはそう言うのと、につこり笑った。

「それよりも火星丼ですよ、火星丼。

合成蛋白質や海藻野菜や海米みたいな生産性とカロリーー最優先で味は二の次みたいなものは、こつちじゃなかなか手に入らないんですから味わって食べてくださいよ？」

「いただきます…そうそう、火星丼と言えばこの絶妙な食材の不味さだよな。

地球で一般的に使われている食材を使うと、この味は出せないんだよ。

美味い火星丼なんて、火星丼じゃあねえ。」

酷い事を言っているが、軍人は懐かしそうにそれを頬張っている。

「ふふふ、それじゃあ失礼します。」

アカネはバックヤードに下がると、アキトに声をかけた。

「それにしてもアキト、本当に火星丼作れたのね。」

「だから言っただろ、俺も火星出身だつて。」

アキトはエヘンと胸を張るが…。

「料理人が不味い物作って胸張っちゃ駄目でしょ。」

アカネはアキトに冷たい視線を送った。

「いや、あれはあくまでも再現だから不味いわけで、だから胸張っても良いような気がするんだけど？」

「火星の食材で美味い物作るのが本道でしょ！」

「少なくとも、私はその為にサイゾウさんの所で下働きしているんだから！」

アキトにびしつと言った後、『ふふふ、言っただけで言っただけで顔は綻ばせるアカネ。』

「はいはい。」

アキトはそれを微笑ましい気分で見ていた。気分はちょっぴり老人である。

「そついやアカネは学校通っているんだよね？」

「うん、何故だか気が付いたら地球に居たから、ミスマルの家に帰ってきたのよ。」

アキトとアカネの違いはこのあたりにある。

アキトは火星で両親を亡くした後に天涯孤独の身となって火星の孤児院で生活していたが、アカネはミスマル家に引き取られ地球で暫く生活した後火星の高校に進学したらしい。

そして、ユートピア・コロニーでアキトとほぼ同じ体験をし、気付いたらミスマル家のあるサセボに居たというわけだった。

「火星に、戻りたいか？」

「うん、あそこにはお父さんとお母さんが眠っているのだもの。」

ユートピア・コロニーは表面が消し飛んじやったらしいから、もうお墓が何処にあるかもわからないけれども、それでもね。」

火星の高校に入学したのは、主にその為だったらしい。

「戻るさ、きつとな。」

「うん…。」

アキトはアカネの頭をポンポンと叩き、仕事に戻ったのだった。

そろそろ午後9時、客も居ないので店仕舞いを始めた時に、そいつはやってきた

「ア・カ・ネー！」

馬鹿でかい声で、閉店間際の雪谷食堂に入って来た者が居たのだ。

「え！？コウ兄ちゃん？」

そのガツチリした筋肉質でガタイの良い男をアカネは『コウ兄ちゃん』と呼んだのだった。

アキトはその男に何となく誰かの面影が重なるのが理解できた…ユリカの父親のコウイチロウを若くして髭を取ると、こんな感じかもしれない。

（こ、こいつがこの世界のユリカか…。）

ミスマル・コウスケ、ミスマル家の跡取り息子である。

身長は190？超、筋肉質で逆三角形の威風堂々たる体格の持ち主であり、ユリカと同様士官学校を首席で卒業する予定の人物らしい。背が高く立派な体格という点では、女性としては長身でプロポーシヨン抜群だったユリカとの共通点があると言えなくもない…。男だが。

「こ、コウ兄ちゃん、士官学校はどうしたの？」

「外出許可貰ってきたから大丈夫！

それよりもだ、火星だぞ、火星！」

そう言つて、コウスケはアカネを高い高いするように持ち上げた。

（いきなりそれを言うか！？

周囲には俺たち以外に誰も居ないな…。よし。）

アキトは最重要機密である火星への渡航を口に出したコウスケに仰天しつつ、周囲の気配を探り誰も居ない事を把握して安堵する。盗聴器の類は、流石にこんな食堂にはないだろうからと除外した。

「うひゃあ！何するのコウ兄ちゃん！？

火星だけじゃわけわかんないし！」

「火星に行くぞー！」

コウスケはそう言いながらも、高い高いをやめない。

ぶっちゃけ、アカネのパンツが丸見えで目のやりどころに困るので下ろして欲しいアキトだった。

「か、火星って、火星に行けるの!？」

「おう、俺が艦長だぞ、アカネ!」

アカネの問いに、コウスケは満面の笑みで頷く。

「そっかぁ…火星に行けるんだ。

…それはそうとして、下ろしてコウ兄ちゃん。
これは流石に恥ずかしいから。」

「わははは、アカネは軽いからなあ。」

コウスケは笑いながらアカネを下した。

「士官学校首席とはいえ、有り得ない大抜擢じゃない?
艦長って、佐官がやるものでしょ?

士官学校首席でも、尉官じゃない。」

軍人一家で育ったせいかアカネは軍関係にある程度詳しいらしく、
さらっとその点について質問したのだった。

「その点なら大丈夫!民間の軍艦だからな!」

「民間の軍艦って、何!？」

コウ兄ちゃん、連合宇宙軍の軍人になるんじゃないの!？」

アカネは面食らった声を上げる。

「ネルガル・グループが作った試験艦の艦長にスカウトされたんだ。

乗り気じゃなかったんだけど、火星に行くって言ってから、二つ返事で受けちまったい！

数人分の人事裁量権も貰ったから、一緒に火星に行くぞアカネ。」

その言葉が引つ掛かったので、アキトがさらに慎重に気配を探ると、どこかで感じたような気配がした。

ネルガル・シークレットサービスの人間なのだろうと思われる。

彼らが周囲からの情報を遮断しているらしい。

ユリカにコウイチロウが甘かったように、コウスケはアカネに激甘のようにアキトには見える。

おそらくアカネが火星に行きたがっている事を知っていて、それを餌にコウスケを釣ったのだろう。

「う、うん。」

アカネは真剣な表用で、コクコクと頷いた。

「ええと、ちよつと良いっスか？」

そんなコウスケにアキトは質問してみた。

「それに俺もねじ込んで貰うとか…出来ませんかね？」

「ええと…誰？」

コウスケはアキトに初めて気づいたらしく、首を傾げる。

「テンカワ・アキトって言います。」

「偽名といい度胸だな貴様、しかもうちのアカネそっくりの名を

名乗るとは許せん、成敗！」

やはり即座に偽名だと思われたらしく、コウスケはアキトに激高した

「ちょ、コウ兄ちゃん、アキトの名前は確かに偽名っぽいけど偽名じゃないんだって！」

そんなコウスケをアカネが必至でなだめる。

「いやだって、どう考えても怪しいだろ！？」

「物凄く怪しいけど、怪しくないのよ、アキトは！
今日一日一緒に働いてわかったけど、意外と良いやつだし、火星出身みたいだし！」

アキトに殴り掛かろうとするコウスケにしがみ付いて、アカネは必死に制止している。

「似た名前で火星出身とか、輪をかけて怪しいだろうが！？」

（うんうん、それには俺も同意です。）

アキトも思わず同意せざるを得ない。

頭天边から爪先まで不審人物、それが今のアキトだった。

「うん、うん、怪しいんだけど、ここまで怪し過ぎると逆に怪しくないわよ！」

「まあ…確かに、これじゃあ怪し過ぎてマークしてくれと言わんばかりだな。」

どうやらアカネの一言が効いたらしく、コウスケの怒りは収まった。

「まあそれはさて置き、アカネに呼び捨てされるとか許せんから成敗！」

納まったかに見えたが、今度は別件で怒った。

「どっちともテンカワだから、名前で呼ばないとややこしいってだけよ！」

「そうそう、他意は無いぞ、他意は。」

アカネの言葉に、アキトも同意して見せた。

そもそも、並行世界の自分とどうこうなる筈が無いのだ。知っているから尚更である。

「コウ兄ちゃん、どうする？」

「うーん…まあ取り敢えず、ネルガルに身体検査して貰ってからだな、うん。」

怪しさの塊だし。」

コウスケの訝しげな視線は戻らない。

「ええ、身体検査でも何でもしてください。」

こつ見えても料理と機動兵器の操縦は得意です。」

「機動兵器って、更に怪しい…。」

コウスケがアキトを見るそれは、完全に不審者を見る目つきになっている。

「あははははは…。」

仕方がないとはいえ、その視線が心に突き刺さるアキトだった。

翌日、アキトはネルガルのサセボドックまで出向いた。

「テンカワ・アキトさんですね？」

どうも、お初にお目にかかります。

私、こういう者です。」

アキトはよく知っている胡散臭い笑顔の男。

男が差し出した名刺にはズバリ、プロスペクターと書いてあったのであった。

第02話 神妙不可思議にして胡散臭い男？（後書き）

まだまだテンプレ展開からは逃れられず。

いやまあね、ナデシコに乗らないとかそういう展開も考えたけどね。それってやっぱりナデシコのシェアードワールド化した別の作品になっちゃうし、とか言い訳を試みる。

第03話 テンカワ兄妹

「で、貴方は一体何方なんでしょう？」

テンカワ・アキトという名前の21歳の人間は、火星軌道までの何処を探しても…居ないんですなあ、これが。」

「あはははは…。」

プロスペクターの笑顔の追及に、アキトは朗らかに笑った。

「まあそうでしょうね…言っておきますが、本名スよ。」

そう言うてから、アキトは真顔に戻る。

「あと料理人で、かつパイロットでもあります。」

そして断言しても構いませんが、スパイじゃありません。

俺、逆に目立つでしょう？」

「大昔なら兎に角、この時代に出自が全く分らないとか目立ち過ぎですからなあ、これでスパイなら貴方も貴方を送り込んだ組織も諜報組織としては落第です。」

この時代、身分を誤魔化すならば他人の個人データに偽装するのが当たり前である。

何処の誰だか全く分らないと、今のアキトのように悪目立ちしてしまうからだ。

「DNAデータ、戴いても構いませんか？」

「どうぞどうぞ、俺の身分のまつさらさを証明するなら、何だってしますよ。」

「舌は勘弁スよ?」

舌の粘膜からDNAを摂取されると、暫らくの間熱いものを食べて火傷したみたいになるので、料理人としては勘弁して欲しい所だった。

「仕方ありませんね、頬の裏でやりましょう。」

「口、開けてください。」

「はい…あちっ!?!」

アキトが口を開けると、プロスペクターが器具を突っ込み、それと同時に左頬の裏が熱くなる。口から引き抜かれた器具をポンポンと操って、プロスペクターが何かを調べているのだが、その表情が怪訝そうに曇る。

「はい、これで…と。」

「おやおや、凄いですね貴方。」

「まさか何処にも引つかからないとは。」

「見事にまつさらでしょう?」

「俺も困っているんす。」

アキトはポリポリと後頭部を掻きながら苦笑いした。

「そもそも、何でテンカワ夫妻に息子さんが居るんでしょうねえ?…あそこには確か、娘さんしかいない筈なんですが?」

流石はネルガルのDNAトレーサーと言うべきか、ネルガルのデータベースが必死になって検索を行った結果、アキトが遺伝的に誰と誰の子供かまで調べ出したらしい。

「まあつまり、俺は居ない筈の人間って事なんでしょう。」

おたくの研究室のイネス・フレサンジュ博士の論文とか調べれば、何か出てくるかもしれませんよ?」

「はぐらかしますね…。」

プロスペクターは訝しげな視線でアキトを見、アキトはアキトでこっちに来てから胡散臭げな視線を送られるのは何度目だろうかと内心苦笑していた。

「俺が絵空事みたいな事をいくら言ったって、信じて貰えそうにないんですから。」

貴方がたが俺の存在についてある程度把握したら、全てを話します…それで良いでしょう?」

「まあ確かに、いきなりやって来て絵空事みたいな事を話されても戸惑うでしょうからねえ。」

アキトは『あんた達は疑り深い職業なんだから、まず調べてくれ』と言ってている。

情報の管理などにかかわる人間は、基本的に自分の手で調べ上げた一次情報を一番重要視する。

だからまず調べて、それでもわからない部分だけをアキトに質問して埋めてくれとアキトは言っているわけだ。

「それと、パイロットって言いましたけど、具体的に言えばエステ

パリスの操縦が得意ス。」

「まだトリアル中のそれを何処で…って、貴方が話しても、私達は貴方の事をきちんと調べてからでないと、我々は貴方の話を信用出来ないだろうという事でしたね。」

「いやはや、ややこしい事になりましたな。」

プロスペクターは寄った眉間を指で揉んだ。

「…まあ、いいでしょう。」

取り敢えず私の裁量で、採用という事にします。」

「…信用しないの？」

今度はアクトが訝しげにプロスペクターの顔を覗き込む。

「ええ、信用出来ないが必要な人間は尚更報酬という鎖で縛っておく必要があります。」

それがお金の正しい使い方ってやつです。

文字通り正体不明という、最近じゃなかなかお目にかかれない人物をいきなり消すほどネルガルは野蛮ではありませんからな。」

「そりやありがたいです。」

出来れば消すなんて選択は勘弁して欲しいもんスね。」

プロスペクターの言葉に才人は胸を撫で下ろしつつ、軽口を叩いて見せるのだった。

サセボドック内にある、とある施設までアキト達はやって来ていた。そこにあるものかというと、エステバリスのシミュレーターである。

「シミュレーターでどれくらい出来るのか、見せて戴きたい。」

「それで、給料の額も変わると?」

アキトが冗談交じりにそう尋ねると、プロスペクターはニコリともしせずに頷いた。

「変わりません。」

余程凄いというのであれば、考えなくもありませんが…。」

「それじゃあ、余程凄いと思って貰えるように頑張ります。」

アキトはそう言って、ニヤリと笑った。

「今回はパイロットスーツがまだこちらに届いていないので、Gと被弾時の衝撃モーションはカットしますよ?」

シミュレーターに乗り込もうとするアキトに、プロスペクターはそう言葉をかけたが…。

「そりゃ、ありがたいスね。
でも心配ご無用。」

エステバリスくらいであれば、あった方がしっくり来るんで。」

アキトはそれを不敵な笑顔を浮かべて断る。

何せ、元々乗っていた機体がエステバリスを無茶苦茶に改造したものであり、機体性能に対してコックピットユニットのGや衝撃の吸収がいまいちという変態的な機体だった為にパイロットスーツを着てすら、パイロットスーツを着ずに普通のエステバリスに乗り込むよりも更に過酷な状態となっていたのだ。

だから、アキトとしては着ない方がむしろしっくりくるくらいであった…鍛えに鍛えられていた前の体なら、であるが。

「難易度はどうでしょうか？」

「最高難度で構いません。」

五感が戻っていた事にすっかり浮かれていて、アキトは自分の体が過剰投与のナノマシンが消えただけでは無いという事をすっかり失念していたのだ。

「じゃあ行くぞ…ふぬあっ!？」

加速した途端に体がGに負けそうになって、アキトは焦った。

「しまった、この体めっちゃ鈍ってる!？」

アキトの体はこの頃のアキトと同じものになっていた為、急激なGや衝撃に耐えられるほど鍛えられていないのだ。

「根性おおおおおっ!」

もうこうなると、気力で無理矢理筋力を引き出すしかなくなる。もともと人間の筋肉にはリミッターが付いているが、気力でこれがある程度外す事は可能だったりするのだ。

ブラシーボの一種だが、出来ると思えばある程度までなら何とかなる。

「うおおおおおおおつ！」

アキトはあらん限りの筋力を振り絞って上下左右に変化するGと衝撃に耐えつつ、周囲の状況を把握し、判断し、対応する。

射線を見切って敵の弾を避け、時にはそれを利用して敵を撃破し、センサーを頼りにミサイルを撃ち落とし、それに乗じて敵に近づいて射撃で撃破していく。

シミュレーションは最高難度、50対1でどれだけ生き残れるかというドM仕様な難易度のものでありながら、アキトの機体は殆ど被弾していない。

「こ、これは何ともはや…凄まじいですな。」

「何者ですか、あの入。」

何であれだけの射線を全て見切れるんだ…命を捨てたみたいな戦い方に見えるのに、生き残る為に全てを注ぎ込んでいるというか。」

シミュレータの操作をしていたオペレーターが、絶句している。

アキトが乗っていたブラックサレナという機体は、重装甲で敵の攻撃を弾き返しつつ、高機動でそれを食らう確率を必要最低限に下げ、その代りに武装がハンドガン2門のみという無茶苦茶なカスタムを施した代物だった。

徹底的な特化とそれの更なる研ぎ澄ましによって、短期間で北辰達に乗る夜天光と六連の連携に対応出来るようにした戦闘スタイルが、体だけが3年前のものに戻ったアキトの脳には叩き込まれているのだ。

「ラストお！」

最後の一機が、イミディエットナイフによって切り裂かれて爆散した。

「…と、こんなもんでどうスか？」

シミュレーターから憔悴しきったアキトが、よろめきながら出てきた。

「ハハハ、体が鈍っていたのをすっかり忘れていました。

明日は全身筋肉痛かな、こりや。」

「テンカワさん…。」

ふらつくアキトを見ながら、プロスペクターは絶句している。

「どうでしょう、これなら『余程凄い』の枠に入りますか？」

「も、もちろんですとも！

特別手当を上乗せしましょう。」

プロスペクターは、コクコク頷いて同意した。

「しかし、どうしてこのような技量を？」

「奪われたものを取り返す為と、俺自身の復讐の為ですよ。

…どちらも、既に全部終っちまったけど。」

そう言いながら、アキトはゆっくりと近くにあったベンチに腰かけ

た。

「兎に角、出来得る限りは俺を雇い続けてください。

あんたたちの計画に、俺は必ず役に立ち続ける筈です。」

肩で息をしながら、アキトはニヤツと笑って見せる。

「勿論ですとも。

性格素性はさて置いてでも、能力的に一級品の人材をというのが
今回の求人趣旨ですからな。」

プロスペクターはそんなアキトに微笑みながら頷くのだった。

「…で、本気を出し過ぎて全身筋肉痛と軽い肉離れで身動き一つと
れないとか、莫迦じゃないの？

てか莫迦ね、物凄い莫迦ね、残念な莫迦ね、どうしようもない莫
迦ね、莫迦チャンピオンね。」

翌日、雪谷食堂の二階に用意されたアキトの部屋で、アキトの腰の
上に座って背中に湿布を張るアカネは皮肉全開である。

「い、いや、アカネ、そんな事よりも女の子ならもっと恥じらいを
もってだな。

半裸の男が寝転んでいる上に乗るもんじゃあないと思うぞあいた
たたたたたたっ！？」

断ろうとしたアキトの腕に無言で人差し指をブスツと突き刺し、悶

絶させるアカネ。

「あんたは私の兄弟か何かかッ!?

これが一番張りやすいんだから、しょうがないでしょ。

だいたい、全身筋肉痛で身動き一つとれない男になって、身の危険も恥じらいも感じないから安心して。」

アカネはそう言いつつも、背中とは言え男の半裸を見るのが恥ずかしいのか少し頬が赤くなっている。

「そんなもんか?」

「そんなもんよ。」

アキトの問いに、アカネはコクリと頷いた。

「大体ね、あんたが筋肉痛身動き取れないからって、私に看病任せてサイゾウさん一人で店に出ているんだからね。

働いて食い逃げの弁償するって言ったやつが、その翌々日早々身動き一つ出来ないってどういう事なの?」

「う…その点については、返す返すも申し訳ない限りでございます。」

アキトは申し訳なさそうに頭を下げた…首まで筋肉痛なのか、殆ど動いていないが。

「悪いと思うなら、根性で今日中に筋肉痛治して。」

「無茶言っつなよ…体、鍛え直さなきゃヤバいな俺。」

治ったら、走り込みと筋トレで徐々に鍛えなきゃなと誓うアキトだった。

「おう、大丈夫か？」

サイゾウが部屋に入ってきた。

そして、布団の上でうつ伏せに寝るアキトの上に跨っているアカネを見て一言。

「…イチャついてんのか？」

『違います。』

二人の声が思わずハモった。

「こいつとイチャつくとか、有り得んです、はい。」

そもそもユリカ以外は眼中に無いアキトは、即座に断言した。双子の妹みたいなものなので、そんな気持ちは全く湧かないらしい。

「うわ、何か腹立つその言い方。でも、同じく。」

アカネもアキトの言葉に頷く。

「仲良いな、テンカワ兄妹。」

じゃアカネちゃん、アキトの看病引き続き頼むぜい。」

サイゾウはニヤリと笑うと、部屋から出て行った。

「何か私達、名字が一緒だからって、一緒くたにされてなかった？」

「そうだなあ…。」

（世界は違うとは言え、同じ両親から生まれただけあって、雰囲気
に何処となく似た所があるのかもしれないなあ。）

アキトはそんな事をのんびりと考えていたのだった。

そんな日々が半月ほど続き、そして運命の日が来た。

「お世話になりました。」

「おう、まあ何とか半人前ちよい手前つてところか。」

深々と頭を下げるアキトに、サイゾウが頷く。

流石に半月では、ブランクの完全回復とはいかなかったようだ。

「まだまだが、アカネちゃんのお守やるってんなら仕方がねえな。」

「なっ！？それを言うなら、私がアキトのお守ですよ！」

アカネが真っ赤になって怒りだした。

「もっとも、お守なんかしませんけどっ！」

「あはははは…。」

アキトはその隣で苦笑いを浮かべている。

何故ならば、アカネの隣からアキトを睨みつけているガタイの良い男がいるからだ。

「がるるるる…。」

「コウ兄ちゃん、何やってんの…？」

アカネはコウスケに少々呆れたような視線を送っている。

コウスケはアキトにアカネが懐いているように見えるらしく、それが気に入らないようだ。

「妹は、お前にはやらんぞ…。」

「ええ、いいません。」

アキトは即、コウスケの言葉に同意する。

「うちの可愛い妹がいらんとは何事だ貴様!？」

「どう反応すりゃ納得するんだ、あんたは!？」

激昂したコウスケに、アキトは全力でツツコミを入れたのだった。

「そもそもだ、テンカワ兄妹とか呼ばれているのが気に入らん！
アカネは俺の妹だあっ！」

「別にそれで良いけど。」

アキトは即、コウスケの言葉に同意する。

「アカネがお前の妹呼ばわりされるのが不服だとしても言うのかあッ
！？」

「だから、あんたに対する正解は何処なんだっ！？」

殴りかかって来たコウスケの拳を紙一重でかわしつつ、アキトはツ
ッコむ。

「ちょ、コウちゃんっ！迷惑だよ！？」

あらぶるコウスケに、そんな声かけられた。

「じゅ、ジュン姉ちゃん！？」

アカネが驚いた声をあげ、慌てる。

「あれ、アカネちゃん…？」

声が聞こえた先に立っていたのは、小柄でストレートのロングヘア
の美少女。

いや、年齢は二十歳だから既に少女では無いのだが、かなりの童顔
なせいで実年齢よりも年下に見えるのだ。

ぶっちゃけ、中学生と言っても誰も違和感を抱かないレベルである。

「ジュンまで女なのかよ…。」

アキトはよろめくと、思わず小声で呻くようにそんな声を上げた。

「ジュン姉ちゃん、コウ兄ちゃんと同じ制服…くう、流石嫁だねえ、やるねえ。」

「ち、違つよ、私は子供の頃からコウちゃんを補佐してきたから…。」

慌てるジュンの肩を、アカネはポンポンと叩く。

「ジュン姉ちゃん、それこそが嫁の発想だよ、うん。

ぐつちよぶ、だよ。」

「ふえ！？違う、違つて。」

顔を真っ赤にして否定するジュンに、アカネはコウスケに聞こえないように囁きながらサムズアップして見せた。

（女でも、弄られキャラっぷりは変わっていないのか、ジュン…。）

アキトもそんなジュンに、心の中でサムズアップ。

「それにしても、二人とも何でここに？」

首を傾げるアカネに、コウスケがハッと我に返る。

「そうだった…親父が来る。」

アカネ、逃げるぞ！」

「へ？」

コウスケはアカネをひょいと持ち上げて小脇に抱え、迎えに来ていたネルガルの車に放り込んだ。

「ひゃあ！？」

親父：「つて、コウイチロウ小父様にばれたの！？」

「ああ、あの莫迦親父…アカネを火星に行かせたくないらしい。だから親父が追いつく前に地球圏を振り切る！
ジュン、行くぞ！」

「う、うん！」

ジュンも急いで車に乗り込み、ボタンとドアが閉まると走り去ってしまった。

「俺は…？」

「置いて行かれたみたいだな。」

サイゾウの言葉に、アキトはがつくりと肩を落とした。

「急がねえと拙いみたいだぞ…出前用の原付貸してやるから、それで早く行け。」

サイゾウが指しているのは、アキトやアカネが出前に使っていた原付だった。

「結局こういう展開かよ！

いや、自転車じゃないだけまし…か？」

ヘルメットの紐を締めつつ、アキトは愚痴る。

「じゃあサイゾウさん、お借りします！」

アキトを乗せた原付は、ネルガル造船のサセボ・ドックに向けて全速力で走りだしたのだった。

第03話 テンカワ兄妹（後書き）

まあそんなわけで、そろそろアニメ本編っぽい展開も絡んで来るかも？

いやしかし、眠い。

第04話 暑苦しい人、登場！

サセボ市内を一台の原付が疾走している。

「ぬあああああああああつ！？」

『その原付、止まりなさい、止まりなさい！』

現在、テンカワ・アキトはネルガル造船のサセボドックに向かって、全力で逃亡中である。

原付を借りて、颯爽とドックへ向かったまでは良かったのだが、パトカーに制限速度違反で見つかったのだった。

「止まれるかー莫迦ー！？」

そう、タイムトラベラーというか並行世界ジャンパーというか、そんなアキトにはズバリ身分が無い。

身分が無いという事は、免許も当然持っていない。

しかも誰だかわからないとか、不審者として逮捕してくれと絶叫しているようなもんなのだ。

そしてアキトには、逮捕されてサセボにずっと滞在とかいう選択肢は無いのだった。

「どこか、何処かあのパトカーをまけそうな場所は！？」

よっしゃ、あの路地なら！」

アキトの乗る原付は細い路地を抜け、道路に抜けたが…。

『そんな所を抜けてもお見通しだぞー！

止まりなさい！』

パトカーはこのあたりの地理を知り尽くしているのか、すぐに追いついてきた。

「…ちっ！仕方が無い！」

アキトは原付を停止させて、懐の拳銃を確認する。

それはヤクザ経由で入手したイジエマツシ社製のMP-443グラッチという、ロシア製の古い拳銃だった。

弾は9？パラベラム弾の装弾数17発で、オーソドックスに仕上がった信頼性の高い拳銃だ。

「やー、すいませんすいません。」

「ちょっとスピード出し過ぎたみたいスねえ。」

「逃げるとか、何考えているんだね君…い！？」

アキトは笑顔で警官の一人に歩き寄って一気に間を詰め、鳩尾に一発入れてくの字に曲がったところで更に顎にひざ蹴りを入れる。

鳩尾に喰らった衝撃と、脳を揺さぶられた事で警官は白目を剥いて気絶した。

「すいません、此处でとっ捕まるわけにはいかないンス。」

「な、何をするん…がっ！？」

びっくりしたまま固まっているもう一人の警官に、アキトは一気に駆け寄って拳銃を振りおろし、頭が下がったところで顎にひざ蹴り…とはいえ、脳に衝撃を与える為であって、顎を破壊するようなも

のではない。

もう一人の警官も気絶して動かなくなった。

「衝撃だけ与える為とはいえ、太股痛エー…流石に半月じゃあ元には戻らないよな。」

人通りの無い通りで良かったと思いながら、アキトは拳銃を懷から抜き放ってパトカーの前輪2輪を撃ち抜き、ついでにパトカーの記録装置を破壊する。

火星の後継者を追っていた時に覚えた知識だったが、思わぬところで役に立ってしまったようだ。

「ごめんなさい、たぶん後遺症は無いと思うんで。」

この後のサセボ襲撃で有耶無耶になりますように…。」

倒れ伏し動かない警官達に手を合わせ、これしか無かったとは言えサイゾウに追求が及びませんようにと祈りつつ、アキトは再び原付に跨った。

「はあ…何だかんだ言って、普通の男の子に戻るのは無理だよなあ。」

アキトは一言そう愚痴ると、再び原付を発進させるのだった。

一方こちらはネルガル造船サセボドックの入り口。

「…あ、アキト忘れた。」

送迎車から降りたアカネは、口の端を軽く引き攣らせてそう一言呟いた。

「コウ兄ちゃん、アキト忘れて来ちゃったんだけど…」

「あいつなら、後で来るだろ。」

コウスケは素っ気なく、アカネにそう言った。

「クククク、あいつなら間に合うさ…」というわけで、全速力で出航の準備始めるぞ、ジュン！」

「は？え？ふえ？」

コウスケはそう言ったが、ジュンは何が《というわけ》なのか分からずに、混乱している。

「いいから、早く来い！」

「う、うん！」

ジュンは急かすコウスケについて、走り出した。

コウスケ達はドタバタと駆けて行ってしまった為に、アカネだけぽつーんと取り残される。

「おーい、コウ兄ちゃんや…あたしゃ一体何処に行けば良いんだい？」

アカネはコウスケ達が走り去った方に声をかけるが、返答するものはない。

「うーん…どうしよ？」

…いつそ、アキトを迎えに戻るってのも悪かないか。」

「おやおや御嬢さん、お困りで？」

そんなアカネの前に、一人の男が現れる。

「おお…何か胡散臭い人が来た。」

「せっかく親切心で声をかけたのに、胡散臭いとは失礼な人ですな…。」

アカネに胡散臭いと言われて傷ついているのは、プロスペクターであつた。

とは言え、赤ベストに眼鏡に髭は、確かに少し胡散臭いかもしれない。

「だって、髭が胡散臭いじゃん、すごく。」

アカネ的には、特に髭らしい。

「…泣きますよ。」

ちよつと涙目のプロスペクターである。

「ご、御免なさい。」

私っている事が時々ポロつと出ちゃうんですよ、あははの

は。」

「全然フォローになっていません！」

「まあ良いです、私こういうものです。」

アカネが受け取った名刺には、ネルガルのロゴとプロスペクターとだけ書いてあった。

「…ヒラ社員の人？」

「違います！」

ちよつとした事情で、肩書きは出せないだけです！
いちいち失礼な娘さんですね…。」

プロスペクターは少し怒り始めた。

「偉い人？」

「割と。」

アカネの問いに、プロスペクターはコクリと頷く。

「それは御免なさい。」

「わかって貰えれば良いんです…なんか、調子狂いますなあ。」

ぺこりと謝るアカネに、プロスペクターは困惑の表情を浮かべた。

「テンカワ・アカネです。
宜しく願います。」

「あ、はい、これはご丁寧に。
ところで、お兄さんはまだいらっしゃっていないようですね。」

アカネの名前を聞いて、プロスペクターは取り敢えずカマをかけてみる事にしたのだった。

「コウ兄ちゃん…じゃなくて、ミスマル・コウスケならもう来てますというか、一足先に言っちゃいましたけど、ダッシュで。」

「おや？テンカワ・アキトさんは御兄弟なのでは？」

プロスペクターは空々しく首を傾げるが、アカネはそれに気づかない。

「あはははは！確かに名前は似てますが、私とアキトは赤の他人ですよ。」

「それは失礼…しかし、それは困りましたなあ。」

プロスペクターはボソリとそう呟いた。

「え？困ったって、何がですか？」

「ま、それに関しては急いでいますので、おいおい。」

先程までの仕返しとばかりに、プロスペクターはにっこり微笑んだままサラッと流した。

「それよりも、その手の甲のタトゥー…IFSナノマシンを投与さ

れているのですかな？」

「え？あ、はい。」

先に言っておきますけど、私パイロットじゃないですから！
これは火星に住んでいた頃、バイクの免許取るのに投与したんです。

あつちで機械動かすには、絶対にIFSナノマシンの投与が必要になるから……。」

慌ててタトウーを隠し、アカネは警戒感に満ちた視線をプロスペクターに送った。

「はい、はい、勿論存じてますよ。」

ですから、あまり警戒しないでください、ハイ。」

「地球に来てから、これを見るたびにパイロットと勘違いされるんですよ。」

IFSナノマシンで気が荒くなるなんて、とうの昔に改善されているのに地球の人は迷信深いから……まあ、私も火星に行くまでよく知らなかったんだけど。」

アカネは『ほうっ……』と溜息を吐いた。

タトウーを見て同情されるのも軽蔑されるのも、いい加減勘弁して欲しかったのだ。

「こちらでは、もう40年近くも前になる初期型IFSナノマシンの事故の件が、いまだに傷痕として残っていますからなあ……。」

そんなわけで、IFSを使える人材は貴重なわけでした。」

「……何か、IFS使う機械があるんですか？」

まだ警戒を解ききらぬまま、アカネは訝しげな表情を浮かべてプロスペクターに訊ねる。

『どうもこのおっさんは怪しいのよね』とか思いながら。

「ええ、このナデシコ搭載の最新型機動兵器は、ISF対応の機体でしてな…。」

「私はパイロットじゃあ無いって言ったじゃありませんか!？」

そりゃ動かすだけなら何とかなるかもしれないけど、戦うなんて無理です!」

プロスペクターの言葉に、アカネは焦った表情を浮かべて断ろうとする。

「まあまあ、話は最後まで聞いてください。

貴方に戦ってくれ、などとは言いませんよ。

アニメみたいにロボットに乗った少年少女が何の訓練も無くいきなり敵を倒す事が出来るのかというような無謀な実験する程、ネルガルはカネやモノが有り余っているわけではありませんからな。

ましてやヒトは貴重です、それがIFSナノマシン保有者ならば尚更。」

プロスペクターはアカネをどうどうと宥めながら、そう言って微笑みかける。

「じゃあ、何なんですか?」

「戦闘以外の時に活躍する整備補助の予備パイロットというものですよ。」

パイロットの皆さんは任務の後疲れて帰ってきますが、地球では基本的にIFSナノマシンを投与している人は少ないわけでした。機体の移動が出来るスタッフが他にいれば、パイロットの負担を可能な限り和らげられると…まあ、そういうわけです。」

警戒の視線を送るアカネに軽く苦笑を浮かべながら、プロスペクタ―はそう告げた。

「つまり、ネルガルの最新鋭技術の結晶である機体…新型機動兵器エステバリスの移動係ですな。

あと、エステバリスは機動兵器としての使用以外の役割もあります。

戦闘以外で使う際にも操縦していただく事がありますが、基本的に戦闘には参加しません。」

「…成程。」

アカネは少し考え込みつつ頷いた。

「それで、お手当なのですが…今の調理師補助のお給料がピポパ…と、これくらいで。

そして、これに予備パイロットのお手当が付きますと、ピポパ…こんな感じになっております。」

「うわ、何この額、格差だ、格差だわ。」

調理補助とパイロットで給料にかなりの格差がある事を知って、アカネは仰天した。

「でも、これだけあれば、将来お店を開く時の資金になるなあ…む

う。」

アカネの夢は調理師であり、調理師の夢とはすなわち店を持ち一城の主となる事である。

つまり、将来店を開く為にはお金は必須なわけで、予備パイロットの給料はかなりの魅力だった。

「うーん…分かりました。

それじゃあ、そっちで契約し直します。」

「おお、ありがとうございます。

契約内容変更依頼書です。

こちらにサインをお願いします。」

プロスペクターがサツと差し出した契約書に、アカネはさらさらっと名前を書いたのだった。

「ありがとうございます。

では早速ですが、お手伝い願いますよ！」

「えっ！？いきなりですか？」

アカネの問いに、プロスペクターは仰々しく頷く。

「はい、実は…ですなあ。

今このサセボには木星蜥蜴の攻撃部隊がかつてない規模で進撃中でして。」

「た、戦わないって言ったじゃないですか！？
だいいち、私戦えませんよ！」

アカネは焦って詰め寄るが、プロスペクターは笑いながら制止した。

「はい、はい、勿論ですとも。」

貴方は予備パイロットという扱いですから、基本的に戦闘には参加しません。

先程も言いましたがエステバリスは、ある意味IFS操作に特化した特別な機械であり、その形状ゆえに機動兵器としてだけではなく重機などの代わりも出来るんですなあ、これが。

今回していただくのは、言うなればフォークリフトの運転みたいなものです。」

プロスペクターは、そう言ってアカネにウインクして見せた。

「フォークリフト…ですか？」

「はい、ついて来ていただければわかります。」

すたすたと歩き始めたプロスペクターに、アカネはついていく。するとさほど時間のかからない場所に、大きなエレベーターがあった。

「うわ、大きなエレベーター…。」

「ああ、アカネさんアカネさん、そちらは物資搬入用のエレベーターです。」

こちらが人用です。」

プロスペクターが指差したのは、あまり大きくなくいかにも業務用というか、工事現場というか、炭鉱というか、そんな感じの骨組み

だけで出来たエレベーターだった。

「何か秘密基地みたいなエレベーターですね。」

「まあ、秘密基地のようなものですからなあ。」

そんな事を言いながら二人はエレベーターに乗り込む。そしてプロスペクターは一番下の階のボタンを押した。

「一番下にドックがあるんですか？」

「ええ、ますます秘密基地みたいでしょう。」

ですが、これにはきちんとした理由がありましたな。

…これが一番経済的なんですよ、これが。」

一番下の階に向かう事を不思議に感じたアカネの問いに、プロスペクターは答え始めた。

「経済的…なんですか？」

地下に造るのに？」

「ええ、実はナデシコ計画に限らず、現在地球連合加盟国の建艦計画は軒並み停滞しております。」

ビッグバリア…ご存知でしょう？」

あれが出来るまでに相当な数の艦がドックごと破壊されてしまあ、ついでに言うとは実はあのビッグバリアも結構抜かれていまして破壊は現在進行形で続いておりますのです。

まあつまり、地上ドックは作っている最中の艦が破壊されてしまう可能性があるので、とても不経済というわけですな。

地下ドックは建造費自体は高くつきますが、こういう時は経済的

というわけです、ハイ。」

プロスペクターは、まさに商売人という表情を浮かべて、そう言った。

「なるほど、確かに造ろうとしても壊されたら、余計にお金がかかりますもんね。」

「はい、そうです。」

特にナデシコは真^まつ新^{しん}な状態からの新規開発でしたから、造っている途中に破壊されたりしたら追加でかかるお金は莫大なものとなります。

しかも軍に制式化されていなければ、政府からの補償金も出ないという、もうどうにも損ばかりとなりますわけですな。」

そんな話をしているうちに、エレベーターが止まりドアが開いた。

「これが次世代型地球連合宇宙軍戦艦の雛形、機動戦艦ナデシコです。」

「機動…戦艦？」

そのみょうちくりんな名前に、アカネは首を傾げた。

「巡洋戦艦とかなら聞いた事ありますけど、機動戦艦って？」

「おや、意外と軍艦にお詳しい？」

首を傾げるアカネを見て、プロスペクターは意外そうな表情を浮かべる。

「子供の頃にミスマル家に引き取られてから、かなり詳しくなりました。」

代々軍人とかで、そっち系の文献には事欠かない家だったんです。コウイチロウ小父様とか、コウスケ兄ちゃんもそっち系の話ばかりでしたしね。

実際、私も一時期は軍人目指していた事もありましたし。」

「成程、門前の小僧習わぬ経を読むという奴ですか。それならば納得です。」

それで、機動戦艦というのがどういうものか知りたいと？」

プロスペクターにそう訊ねられ、アカネはコクリと首を縦に振った。

「はい、ざっとで良いので。」

「ま、アレですな。」

機動戦艦という呼称は、半ば我らがネルガルのハツタリです。

新型機動兵器のエステバリスを運用する為に造られたという事と、今までの百数倍の出力を持つ新型エンジンのお蔭で重力制御および慣性制御がより強力に行えるので、戦艦としてはあるまじき加速性と旋回性能を誇るといふ点を掛けて名づけられました。

一応、計算上は宇宙空間に於いて現行の地球連合軍の全艦艇を単艦で相手にしても数時間で殲滅可能です。」

ぱつと聞いただけでわかるナデシコの無茶苦茶さに、アカネは呆然とした表情を浮かべる。

「いったい、技術的ブレイクスルーを何世代スッ飛ばしたんですか、この艦……。」

「木星蜥蜴の艦を凌駕する事を目的に開発されましたからな。

あちらの技術を盗んで解析して、何とか間に合ったといいますが、何と言いますか。」

逆に言うと、木星蜥蜴は技術的に現行の地球連合の数世代先の技術を持っているという事ですから、まあ今まで殆ど為す術無く殲滅されてきたのも当たり前だったというわけです。」

何せ火星上空での開戦からこっち一度も勝利していないというか、相手に殆ど何の損害も与えずに一方的な敗退を続け、ついには地球圏の制宙権も奪われて軌道上のスペースコロニーと月の地上構造物を喪失し、地球の全電力を統制して凄まじい量の電力を送っているビッグバリアによって亀のように引き籠らざるを得ないという見るも無残な状況なのだ。

負け続けで軍の士気は地まで落ち、月やスペースコロニーからの物資が途絶えて地球の経済は大混乱し、地球連合加盟国政府の支持率もガタガタ。

無力感と無気力と絶望がごちゃ混ぜになった敗戦寸前な厭戦気分が、地球を覆い尽くしていた。

「それにしても、変わった形ですね。」

「ああ、あれはフィールド・ブレードですな。

スペースタイムディストーションフィールド

時空歪曲場、通常スペースとタイムを省いてディストーション・フィールドと呼ばれる一種のバリアを発生させる装置です。

堅牢さに於いては、あのビッグバリアなど比べ物になりません。」

聞けば聞くほど今までの常識では有り得ない戦艦だというのが、軍事的な知識は聞きかじった程度のアカネでも理解できた。

「うはあ…確かにこれなら火星に単艦で行けそうですね。」

「はい、その為に優秀な人員をかき集めましたしな…と言っても、何処も慢性的な人手不足なので、性格とかは完全に置いておきましたが。」

そう言つて、プロスペクターは口の端を引き攣らせた。

スカウトの時のアレコレが、走馬灯のように脳裏を駆け巡っているのかもしれない。

「嫌な事を思い出しました…それは兎に角、これから貴方にやつてもらつた仕事が、あれを使つた荷物の搬入です。」

プロスペクターが指差した先にあつた物は、一体の人型ロボットだった。

「おおお、完全人型!？」

「はい、あれがエステバリス。」

我らがネルガル重工が作った新型機動兵器です。」

その人型兵器は、見事なまでにピンク色だった。

「人型なのは良いとして、兵器なのにピンク色…私、アレに乗るんですか？」

「ピンク色…女の子らしくて良いではありませんか？」

ゲンナリした表情を浮かべるアカネに、プロスペクターは笑顔で言い放つ。

「確かに、色的には女の子らしいかもしれませんが…まあ、アレで戦うわけじゃなし、良いか。」

ピンクの重機なら、何とか納得できるし。」

「頑張つて下さいね、その為に手当が付くんですから。」

凄く乗りたくなさそうなアカネに、プロスペクターはそう声をかけたのだった。

「じゃあない…いつちょやりますか!」

むんつと気合を入れて、アカネはエステバリスに向かい走っていったが…。

「待てえい!」

コックピットに入ろうとしたところで、上から声をかけられる。逆光で良く見えないが、若い男っぽい容姿だった。

「ん? 誰?」

「貴様に名乗る名前は無い!」

アカネは誰か聞いたが、思いっきり拒否された。

「あつそ、それじゃあ私は仕事があるから。」

答えてくれなくても仕事には支障が無いので、アカネは再びコックピットに入り込もうとするが…。

「あつさり流すなああああッ!？」

そこは怒ってもう一回名前を聞き返したり、何かするトコだろう!？」

「めんどい、ぢゃ。」

アカネはひらひら手を振って、コックピットに入り込んだ。

「ああああッ！」

俺のゲキ・ガンガーに先に乗りやがったなあッ!？」

「何なのよ、私はこの重機使って物資の搬入やれって言われているんだけど?」

慌てて飛び降りコックピットにやって来た男に、けげんな表情を浮かべて抗議するアカネ。

「重機ぢやねえッ!ゲキ・ガンガーだっつってんだろ、この莫迦女!」

「ウザい。」

アカネはコックピットに入って来ようとする男を蹴り出して、ハッチを締めた。

雪谷食堂で男のあしらいはそれなりに慣れているアカネである。

しかも客でも何でも無い上に、《名乗る名前は無い》だの《莫迦女》だのと言われた相手に優しくする必要など欠片も無かった。

「はいはい、避けてねその暑苦しい人。」

「暑苦しい人とは何だ！」

俺にはダイゴウジ・ガイっていう、立派な名前が…。」

「貴様に名乗る資格は無い！」

先程の意趣返しをしながら、アカネはエステバリスをゆっくりと立ち上がらせる。

「酷っ!？」

「あんたが先にやったんでしょうが。
良いから退いてよ、邪魔だから。」

そう言いつつ、アカネはエステバリスという機体の感触を確かめていた。

「あ、アレはだな、名を聞かれた時の様式美ってやつで…。」

「成程、IFSとタトウのシンクロ率を上げる為に、わざわざ人型にしたのね、これ。」

イメージがダイレクトに伝わる感じだわ。」

「無視かよ!？」

アカネはダイゴウジ・ガイと名乗った青年の言う事を完全に無視しつつ、機体の確認を続ける。

「いいから、もう退いてよその暑苦しい人。
なんとなく掴めてきたから、これから物資の搬入はじめます。」

「

「ガイだ…うあわっ！いきなり人をつまむな、危ないだろうが！？」

アカネはエステバリスでガイの体をつまむと、そつと床に置いた。

「暑苦しい人、邪魔で暑苦しいから、どっか行つて。

暑苦しいから。」

「暑苦しいって三度も言われた！？

…しかし、いきなり乗った機体で人みたいな柔らかい物潰さずにつまむとか、やるな。

まあ、ゲキ・ガンガーは他にもあるから、そっちに乗るか。」

ガイはそう言つて、ナデシコに向かって走つて行つたのだつた。

「さて…と、物資の搬入は大体終わったわね。」

アカネが思った以上にエステバリスの操縦に慣れるのが早かったお蔭か、物資の搬入は粗方終わっていた。

『ゲキガン・フレアー！』

「そこの暑苦しい人！遊んでいるならこつち手伝つてよ！」

ガイが乗る青いエステバリスに、アカネは怒鳴りつける。

「誰が暑苦しいひ…何だ、何だア!？」

ガイが反論しようとした時、広大な地下ドックに轟音が響き渡ったのだった。

第04話 暑苦しい人、登場！（後書き）

地震のショックとUSBメモリのデータ破損の影響でかなり間が空きました、何とか復活です。

あと2話ほどで、アニメ版1話相当分が終わりそうな感じ。

・・・終わればいいね。

あと、感想欄を完全開放しました。

口グインしなくても良いなんて設定があったのか、知らなかったい。

第05話 いたってシンプルな作戦

サセボ市内を一台の原付が疾走している。

「ぬあああああああああつ!？」

『その原付、止まれ、止まれゴルアアアア!』

数台のパトカーに追いかけて。

「何でバレてんだー!？」

どうも対処法にいくつか手違いがあったようだ。

同僚に危害を加えられたせいで、パトカーに乗る警官達は完全にキレていた。

「な…何か、何か方法は…。」

こんなに増えたら、流石に気絶させて振り切るというのは無理である。

かといって、全員手加減せずに殺してしまうという選択肢も、なるべくであれば選びたくない。

アキトは必死に考え、ふと思いついて胸元を探りペンダントを取り出す。

「…そう言えば、こんなのがあったか。」

アキトは首からぶら下げていたペンダントの青い石を見た…元の世界ではジャンプした際に失われた筈のチューリップクリスタル略し

てC・Cが、こちらの世界では何故か復活していたのだ。

「折角のC・Cが勿体ないけど、この際仕方ないよな。」

アキトはC・Cを握りしめるとバイクを止めた。

『よし、止まったな、動くなよ!』

パトカーからそんな声がしたが、勿論アキトは動くつもりはない。そんなアキトの周囲を、パトカーから降りた警官達が拳銃を抜き放って取り囲んだ。

「イメージ…。」

目を閉じ、ナデシコの格納庫をイメージする。

チューリップクリスタルが活性化をはじめ、アキトの体内にある元は火星のテラフォーミング用に造られ、火星極冠の遺跡ユニットによって火星に住む人の胎児をボソソジャンプ可能な人間へと調整するように改造されたナノマシンが呼応するように活性化を始める。幾何学状に張り巡らされたナノマシンのコロニーが発光し、アキト皮膚表面に幻想的な文様を描いた。

「な、何だこれは!？」

「木星蜥蜴の新兵器か!？」

警官達はその光景に驚き、拳銃を構えながら後ずさる。

「ジャンプ。」

その声と同時にジャンプフィールドが形成され、アキトは原付ごとボソンの光となり…消えた。

「な…何だ、人が消えた？」

「バイクごと、人が消えた…。」

警官達は呆然と、その場に立ち尽くし続けるのだった。

「な、何？何なの！？」

突如発生した振動に、アカネは周囲の確認をしようとキョロキョロ見回す。

その意思に反応して、レーダーなどの表示が周囲の状況を知らせるべく開いた…アカネはその表示の読み方がわからないので、何の解決にもならないが。

「アテンション、ナデシコクルー各員に通告。」

現在、サセボドックは木星蜥蜴の襲撃を受けています。

出航準備作業は現時点をもって打ち切り、全クルーは本来の持ち場に帰り出航に備えてください。

繰り返します…。」

滑舌の良い綺麗な声がアカネの耳に入ってきて来ると同時に、空中に黒髪を三つ編みに束ねた女性の映像が浮かび上がる。

アカネには彼女がまだ少女と言って差し支えの無い年齢に見えたの

で、取り敢えず訊ねてみる事にした。

「あ、あのすいません、襲撃始まっちゃったんですか？」

「はい、木星蜥蜴の襲撃が本来の予測時間よりも若干早く始まってしまいました。」

パイロットの方…ですよね？」

「え、あ、うん、予備パイロットですけど。」

少女の問いに、アカネはコクリと頷く。

「予備パイロットですか…先日戴いた資料では見ていないんですけど、急に決まった方ですか？」

あ、私は通信オペレーターのメグミ・レイナードです、宜しく。」

「どもども、私はテンカワ・アカネです。」

予備パイロット兼調理補助、よろしく。」

メグミがぺこりと頭を下げ、アカネもそれにつられて頭を下げる。

「んで、私はこのままナデシコに乗り込めばいいんですか？」

「ちょっと待って下さい…はい、そのまま作業を中止してナデシコに戻ってください。」

メグミは後ろを向いて確認をとった後、アカネに対して頷きながらそう言った。

「わかりました、じゃあ戻りますね。」

「あ、ヤマダさんにも戻るように言って貰えますか？
興奮し過ぎていて、こっちの言う事聞いてくれないんですよ。」

「ヤマダ？」

メグミの言葉に、アカネは首を傾げる。
なんとって《ヤマダ》なんて人は知らない。

「はい、ヤマダ・ジロウさんです。」

もう一機のエステバリスのパイロットさんですよ。」

「…えーと、何だったっけ？」

あの暑苦しいの…えーと、ダイカンジ・ジュウゾウとか名乗って
いた気がするんだけど？」

「ダイゴウジ・ガイだア！苗字がおおむねで、名前は濁点以外に共
通点ねえだろそれ！

だいたい何で名前長くなってんだよ！？」

名前を間違えられた事に何故か気付いたガイが、通信に割り込んで
来た。

「あー…暑苦しい人、本名ヤマダ・ジロウっていうんだ。」

「名前覚える気無えだろ、お前！？

まあいい、ヤマダ・ジロウは世をしのぶ飯の名、俺の魂の名前は
ダイゴウジ・ガイだ！

俺の事はガイと、そう呼んでくれい。」

ガイは自分を指さしてポーズを決めながらそう言っが…。

「嫌、暑苦しい人の方が覚えやすい。

本名がヤマダ…タロウだったっけ？」

アカネは本名すら覚えていなかった。

「ヤマダ・ジロウだっ！

っ！か、ヤマダ・タロウはドカベンだ。」

思わずガイが訂正のツツコミを入れる。

「えーと…葉っぱは啜えている人？」

「そりゃイワキだ…。」

ガイはガクリと肩を落とす。

「二人とも、100年以上昔の漫画なんか、よく知ってますねえ。」

それを知っているメグミも、なかなかのものである。

「それはそうと、撤収急いでください。」

「おうっ！」

「はい。」

二人は撤収を始めたのだった。

「…誰も居ないな？」

アキトがジャンプアウトしたのは、ナデシコの格納庫の中だった。
勿論原付も一緒である。

「…サイゾウさんには悪いけど、これはサセボに残しておけないブツになっちまったしな、しょうがないよな、うん。」

アキトは言い訳するように独り言を呟くと、原付をコンテナの横に立てかけた。

そして、周囲を確認する。

「ナデシコの格納庫か、うまくイメージ出来て良かった。

メグミちゃんのアナウンスも聞こえるし、問題無く到着出来たみたいだな。」

そして、嫌な事実に気づいた。

「誰にも見られなかったのは良いけど、ここってコンテナとコンテナの隙間かよ！？」

急いで運び込まれたコンテナとコンテナの間にジャンプアウトしてしまっただけで、出口が無かった。

「おーい！誰かー？誰かここから出してくれー！？」

取り敢えず、アキトは助けを呼んでみる。

脱出は不可能ではないが、楽出来るなら楽するに限るからだ。

『誰？つて、アキト！？』

上からニュツと頭を覗かせたエステバリスの外部スピーカーから、アカネの声をする。

エステバリスの色はピンク色、アキトの乗っていたものと同じ色だった。

「ハハ…乗る機体の色まで一緒か。」

本当にこっちの世界の俺なんだなーとか思いながら、アキトは苦笑いを浮かべてボソツと呟いた。
それからアカネに声をかける。

「酷いなアカネ、何で閉じ込めるんだよ？」

『あり〜？御免御免、居たんだ。
今出してあげるね。』

そう言うと、アカネのエステバリスがアキトを摘み上げる。

「おわアブな…上手いな、アカネ。」

『うん、荷物の搬入に使ってたら慣れた。』

あっけらかんとした声で語るアカネのエステバリスを見ながら、俺ってこの頃こんな器用な事出来たっけと考えるアキトだが、上手く思い出せなかったので諦めた。

「んで、現状は？」

『その前に、どうやってこっちと通信してんの、アキト？』

アカネがアキトをあっさりと見つけられた理由は、アキトとの通信が開いたからだったのだ。

「ああ…これこれ、コミュニケ。

前に来た時に、予め貰ったんだよ。」

「こみゆにけ？」

アキトの目の前に、首を傾げるアカネの画像が出てきた。

「そう、これがあれば、ナデシコの通信網を利用して会話ができるんだよ。」

「私、いきなり荷物運びに借り出されて、まだ貰ってない…。」

まだクルー用の制服すら着ていないアカネは、不満そうに軽く頬を膨らませた。

「急がなくても、後で貰えるから大丈夫だって。
ところで今の状況は？」

アキトはアカネを宥めつつ、状況を尋ねる。

「聞いてないの？
木星蜥蜴がドックを攻撃中みたい。」

「そうか、んで出航出来るのか？」

アキトの問いに、アカネは首を横に振った。

「私に聞かれてもわからないよ。」

たぶん、コウ兄ちゃんが出航の為の作戦考えているとは思っけど。

「

「そうか…まあ、それなら大丈夫…かな？」

ユリカじゃないから断言は出来ないよなと思いながら、アキトは頷いた。

「へっくち！？」

ナデシコ艦長ミスマル・コウスケは、いきなり鼻がムズムズしてきて思わず思い切りくしゃみをした。

「コウちゃん、風邪？」

それを見て、ジュンがティッシュを差し出しながら心配そうに声をかける。

「大丈夫…誰かに噂されるような事したか、俺？」

メグミ・レイナード…さん？なんか、階級無いと呼びにくいな。」

ジュンから渡されたティッシュで鼻をかんしてから、メグミに声をか

けるコウスケ。

コウスケはユリカと違い、肩書きとかが若干気になる性質らしい。

「あはは、メグミで良いですよ、艦長。
それで、何でしょうか？」

「んじゃメグミ君。
これから全艦放送するから、流してくれ。」

コウスケはそう言いながら、艦長用の操作盤からマイクを取り出した。

「諒解、全艦放送に切り替えます。」

「うむ…あー、テストス…。」

コウスケはマイクを握りマイクのテストを始めた。

「艦長、二枚目ねえ。
目の保養になりそうだね。」

操舵士のハルカ・ミナトが、嬉しそうにメグミにそう声をかける。

「どう見ても、甲斐甲斐しい彼女付きですけどね。」

メグミはそう言いながら、ジュンに視線を送る。

「ルリちゃんはどう思う、ああいう艦長？」

「私、少女ですから良く分かりません。」

ハルカは更にナデシコの統合制御オペレーターであるホシノ・ルリに声をかけたが、ルリは素っ気ない答えを返すのみだった。

「アテンション、ナデシコ艦長ミスマル・コウスケより全艦クルーへ。」

皆さんへ艦長として挨拶して訓示の一つもぶちたいところだけど、忙しいので省略。

知つての通り、現在当艦は何故かドックごとピンポイントで木星蜥蜴の攻撃を受けています。

座して死ぬのは嫌なので、若干スケジュールを繰り上げて出航する事にしました。」

「ちょほいと待ちなすわい！」

ブリッジに、茸カットというなかなか無い髪型の連合軍将官の制服を着た男が入って来た。

彼はムネタケ・サダアキ准将、肩書きは副提督。

連合宇宙軍としては完全民間の宇宙軍艦というのは受け入れ難かったが為に、監視役として連合軍の軍人を監視役として送り込んだ。

一応ナデシコは一隻で艦隊という事にされ、提督と副提督が派遣されていたのだった。

それだけナデシコは注目されている艦という事でもある。

「そんな事をしなくても、ディストーション・フィールド展開して上昇すれば良いでしょっ！」

「…そんな事をすればドックが完全に破壊されます。

ドックが一つでも多くあるべきこの時期に、それは随分と贅沢な

作戦であると考えますが？」

眉一つ動かさずに、コウスケはムネタケにそう言った。

「ぐっ…。」

ムネタケはあっさり返されて言葉に詰まる。

「しかもこのドックは、このナデシコの建造後はリアトリス級の改修に使用される予定のドックです。

連合宇宙軍の今後の為にも、ドック内に於けるディストーション・フィールドの展開はしない方が良くかと小官も愚考致します。」

更にジュンがムネタケに対してそう述べた。

「ふむ…やりたまえ。」

ムネタケの後ろからゆっくり入って来て、そのまま沈黙を続けていたフクベ・ジン大将（肩書きは提督）が、一言そう言った。

「しかし、提督！？」

「艦長と副長の進言には理がある。

確かに貴重な地下ドックを失うわけにはいかん。

提督として命令だ、やりたまえ。」

ムネタケは拘るが、フクベはそう言って頷く。

「は！ありがとうございます。」

コウスケはフクベに敬礼すると、マイクを持ちなおした。

「作戦は至ってシンプルだから、聞き流してくれていい。

まず第一に木星蜥蜴の黄色いあんちくしょうこと、バッタは割とシンプルなロジックで動いてる事が知られている。

最優先は自分を攻撃してくるもの、その次に自分たち以外の移動するもの、そして最後に作戦目標……ただし、予め設定された作戦範囲からは出て行かない。

つまりだ、バッタに数発ブツ放してから逃げれば、連中が設定した作戦範囲から逸脱し過ぎない限りは皆揃いも揃って馬鹿みたいに追いかけて来るって寸法だ。

だからナデシコを無事に発信させ、ドックを守る作戦には困が必要になる……そんなわけでヤマ……じゃなくて、ガイ頼んだ！

連合宇宙軍時代に『突撃莫迦の癖に避けるのが滅茶苦茶上手い』と言われた、お前の避けテクを今ここで見せてくれ！」

コウスケがそう言うと同時に、ガイの映像が映る。

「……すまん、はしゃぎ過ぎて足折った。」

《ズコー！？》

コウスケを含めた、艦内の全員がずっこけた。

「何やってんだー！？」

起き上がったコウスケが、思わず怒鳴りつける。

「フツ、俺としたことが人型ロボットにととう乗れたんで、はしゃぎ過ぎちゃったぜ。」

「格好付けて言うこつちゃねえよ！」

どうすんだよ、お前しかパイロット居ないのに!？」

目算がズッコケて、頭を抱えるコウスケ。

「行きたいんだが…痛過ぎて、急な回避行動とかしたら、撃墜される前に俺が死ぬ。」

「死んでもいいから、行つて来い。」

パイロットお前しかいないんだから。」

「いや、パイロットなら居るぜ。」

ガイがそういうと同時に、アカネの映った映像がコウスケの目の前に開いた。

「アカネ!？」

「ええ!？私は飽く迄予備で、戦闘とか無理だから。」

「つか暑苦しい人、何で何時の間にか足折ってんのよ!？」

そう言つて、アカネはガイに食つて掛かる。

「おい、誰か俺の事を思い出してくれ。」

その声と同時に、エステバリスに掴まれたままのアキトの映像も浮かぶ。

「アキト…?」

アカネが首を傾げて、アキトの方を見た。

「ああ、俺コックっス、あとパイロットっス。」

アキトはそう言っただけで後頭部を掻いた。

「アキトが、パイロット？」

アカネは怪訝そうな表情でアキトを見る。

「悪いかな？」

「別に良いけど、似合わない気がする。」

怪訝そうな表情のまま、アカネはそう断言した。

「似合わない……か、まあ、そうかもな。」

んでミスマル艦長、アカネを出したくないだろ？
それなら答えは一つじゃないかな？」

「よし、死んで来いアキト。」

アキトの挑発するような口調に、コウスケはニヤリと笑ってそう返す。

「戦闘時間はたったの10分間、その間にナデシコはドックを脱出し、デイスティーション・フィールドを展開して、全速力でこの場を脱出……するフリして、ある程度まで進んでから急反転上昇してグラビティ・ブラストで追いかけてきた連中を殲滅する。」

何故か知らんが、連中はこのドックのしかもナデシコのある位置に向けて一直線に進んでいるみたいだからな、行先がわかりやすくてやりやすいってえわけだ。」

「諒解。」

アキトもニヤリと口元に笑いを浮かべて頷いた。

「…んじゃアカネ、エステバリス貸してくれ。」

「本当に乗れるの？」

コックピットのハッチを開きながら、アカネが訊ねる。

映像の向こうのアカネは心配そうな表情を浮かべて、アキトを見ていた。

「大丈夫大丈夫、これでも腕に自信ありなんだから。」

ハッチを開けて出てきたアカネの頭を、アキトはぽふぽふと撫でる。アカネは少し拗ねたような表情を浮かべて、アキトを上目づかいで睨んだ。

「む…子ども扱い？」

「違うよ、さっきはセンキュな。」

アカネとすれ違いにコックピットへと入りながら、アキトはアカネに微笑みかけた。

「礼は受け取っておくわ、まあでも後でジュース奢れ。」

「了解。」

エステバリスから降りていくアカネにアキトは頷いた。

「イミディエット・ナイフはついてる…あとはラピッドライフルか。整備班、誰か居るかー？」

「おう、いるぜ。」

その声とともに現れた映像に映っていた人物は、アキトにとっては懐かしいウリバタケのものだった。

「整備班長のウリバタケ・セイヤだ。

ラピッドライフルならC34って書かれたコンテナにまだ入れっぱなしだから、開けて一番上に入っているヤツ持ってけ。

こんな事もあるのかと…ってな、一番上の奴だけ予め弾を入れとくように頼んであるぜ。」

「ありがとうございますウリバタケさん…C34、あれか。」

アキトはコンテナの蓋を、エステバリスでパカッと開いて中に入っていたラピッド・ライフルを取り出した。

エステバリスがIFSを介してアキトの意思を汲み取り倉庫内のC34コンテナを検索、コンテナの電子ロックにアクセスし、コンテナはアクセスして来たエステバリスがロック解除権限があるか否かをオモイカネに問い合わせ、オモイカネはロック解除を承諾。

そんなプロセスを経て、アキトは難なくコンテナの蓋を開けられるというカラクリだが、細けえ事は良いんだよって話でもある。

「それでは、これよりドックのカタパルトで地上に向かって戴きます。」

…何で、ドックにカタパルトなんかあるのかしら？」

メグミが不思議そうに首を傾げるが、まあ戦時だしそういう事もあるのだらうと納得した。

「まあいつか、兎に角これから場所を表示します。」

そこから地上に超特急で届けるそうです…ルリちゃんが。」

「どうも、ナデシコ統合制御オペレーターのホシノ・ルリです、宜しく。」

ルリが頭を下げるのを見て、無表情の中に見える硬さを感じ取り『お、緊張してるな』とか思い、アキトは思わず微笑んでしまった。

「…何で、微笑んでいるんですか？」

「微笑ましいから、微笑んでいるんだよ。
リラックスして、頑張れ。」

アキトはフォローしたつもりだったが…。

「子供扱いですか？」

ルリ的には、軽くカチンときたようだ。

「私、少女です。子供じゃありません。」

「でも、緊張してるだろ？」

アキトは3人で一緒に生活していた時に、ルリからこの頃のルリ自身の心境みたいなものを聞いていたせいもあって、動じずにそう質問した。

「…確かに緊張はしていますが、任務に支障はありません。」

「そうか、でもリラックスしてくれ。」

俺はそっちの方がやりやすいから。」

ニコニコとルリにそう語りかけるアキトに、ルリの目が軽く左右を彷徨う。

「…バカばっか。」

自分を誤魔化すように小さくそう呟くと、再びアキトの方を向く。

「ではテンカワさん、これからテンカワさんには、物資搬送用の直通エレベータに乗っていただきます。」

「あり？カタパルトじゃなかったっけ？」

アキトは首を傾げるが…。

「ええ、そのエレベータはリニアレールな上に頑丈に出来ているので、大電力を流せばリニアカタパルトみたいな勢いで上昇させる事が可能なんです。」

かなりの勢いがつくので天空高く飛ばされますが、頑張ってください。」

「ちょ…!？」

しかし残念がら、アキトは既にエレベータに搭乗済みだった。

「じゃ、行つてらっしゃーい。」

「ぬおっ!？」

ルリが無表情で小さな白い手を振ると同時に、エステバリスを乗せたエレベーターが凄まじい勢いで上昇を始めた。

「…ルリちゃん、アレって大丈夫なの？」

ちなみにブリッジのクルーはその光景をモニターで見ている。

「ええ、エステバリスのコックピットに使われている慣性制御技術は高いので、5G程度までならほぼ完全に緩和出来ます。

宇宙で機動戦闘をする為の兵器なので、そのあたりは充実しているんですよ。」

「物知りねえ、ルリちゃん。」

メグミは驚いた表情でルリを見るが、ルリはケロッとした表情で口を開く。

「あ、コレは艦内データベースからの受け売りです。

私、少女ですから、ナデシコ以外はあまり詳しくありません。」

ルリの横にはオモイカネのロゴと、その下に『ググレ』と書かれた表示があった。

「ぐっ…きつついわね、このコンピューター。」

メグミは引き攣った表情を浮かべる。

「はあああああああっ！」

メグミ達のがんびり会話している間にカタパルトと化したエレベーターは凄まじい勢いで上昇し、アキトの乗ったエステバリスごと空中に飛び出した。

「テンカワエステ、射出されました。」

メグミは気を取り直して報告する。

「おーしアキト、せいぜい無様に逃げ回れ、あっはっはっ！」

「わかった後でブツ飛ばすから、ブリッジで待ってる！」

コウスケの酷い物言いに、アキトは額に青筋立てて言い返した。そして、ライフルで数体のバッタをすかさず撃破し、後退。

「この程度、余裕！」

さらにナイフを抜いてバッタの制御系目掛けて突き刺し、一撃で撃破した。

「フン、囷になるのは構わんけどさ、別に全部倒しちまっても構わないんだろ？」

「アキトの奴が多勢に無勢で情けなく逃げ回って罔を果たしている間に、こちらで発進する。」

ドックへの急速注水開始！」

コウスケはアキトの言葉を完全無視して出航準備を始めた。

「無視かよ、クソっ！」

更にライフルで正確にバツタの制御系を撃ち抜き、一撃で屠っていく。

「全部一撃で撃ち落としてやがる…何モンだ、あいつ。」

医務室で足の治療を受けながら、アキトの乗るエステバリスのカメラの映像から映る光景を見て、ガイの顔が引き攣っていた。

「へえ…アキト、凄いの？」

ガイの付き添いで一緒に医務室に来ていたアカネが、そう声をかける。

アカネが何をしているかというところ、林檎の皮を器用に剥いている最中だったりする。

「はつきり言うが、連合軍をひっくり返して総ざらいしても、あのクラスのパイロットは殆ど居ない。」

エステバリスの火器管制装置は確かに優秀だが、あそこまでピンポイントで当てるとなると、気の遠くなるレベルの訓練が必要になる筈だぜ。

至近距離とは言え、制御系を一発で破壊してバツタに自爆すら許さんとは。」

「そうなんだ。」

いや、パツと見凄いのはわかるんだけどね…っ。」

アカネは林檎を4つに切り分け、爪楊枝を指して皿に乗せると立ち上がった。

「んじゃ暑苦しい人、私一旦格納庫に戻るね。」

あんたがズッコケさせたエステバリス移動させないといけないし。

「

「だから、俺の名前はダイゴウジ・ガイだと…しかし、この短期間にウサギ林檎とは、なかなかやるな。」

ひらひらと手を振りながら立ち去ったアカネの背中に抗議しつつ、ガイは綺麗にウサギカットされた林檎を口に放り込んで咀嚼する。

「うん、美味い。」

流石はネルガル、良い林檎用意しやがるぜ。

それにしてもアレだな…あのアカネとかいう奴、どっかで見たよ
うな？」

ガイは思い出せそうで思い出せないその記憶をうんうんと唸りながら引つ張り出そうとしたが、どうしても思い出せない。

「女の子の知り合いなんか殆ど居ないしなあ…デジャヴか？」

そして一言、そう呟いたのだった。

「そりゃ！」

一方、アキトはまだ戦っている。

ライフルの弾は誤りなくバツタの制御系を撃ち貫く…が。

「…弾切れか、こんだけ倒せばまあ仕方がないか。」

そう言いながら、エステバリスにナイフを構えさせるアキト。

「んで、コウスケ。」

俺は何時まで困やってりやいいんだ？

このままじゃあ、全部倒しちまいそうだぜ。」

「しかし出鱈目な強さだな、お前。」

正直呆れたぞ…もう少してドックの注水が終わるから、俺の出番も残しとけ。

メグミ君、ナデシコの浮上予測地帯をエステバリスに送つといってくれ。」

「はい艦長。」

メグミの声とともに、アキトのエステバリスに座標情報が送信される。

それがエステバリスの地図情報及び現在位置と照合され、アキトの脳に《大体このへん》という大雑把なイメージを送り込む。

「出番残しておいてやるから、頑張つて急げよ？」

「せいぜい涙目になって、助けてくださいコウスケさんと懇願するんだな。」

ではしばしさら…。」

コウスケの言葉は途絶え、通信が切れた。

「宇宙空間では通信できるのに、海水で遮断されるんだよな。難儀な話だぜ。」

アキトは急停止して追いついてきたバツタを一刺しで停止させ、再び逃走開始というのを繰り返している。実際、かなりの数居たバツタは、最初に比べると三分の二程までに討ち減らされていた。

それでもやはり、圧倒的な数の違いである。

「うおっと!？」

ディストーション・フィールドが、バツタの機銃を弾き返した。

「まだまだ鍛え方が足りないよな…っとお！」

撃ってきたバツタをナイフで切り裂き、その勢いで更にもう一体のバツタにナイフを突き刺す。

そしてバツタを蹴り飛ばして他のバツタに衝突させつつナイフを引き抜き、近くにいたバツタに突き刺した。

「久しぶりの地上戦フレームってのもあるよな…腕が鈍ってる。まあ、おいおい鍛えるしかないか。」

そう言いながらも、アキトは戦うのを止めない。

まあ、やめたら死ぬわけだから、やめるわけにはいかないのだが。

「さて、コウスケの出番も残しておいてやりますか…と！」

アキトはニヤリと笑みを浮かべると、海に向かって真っすぐに逃走を始めた。

アキトのエステバリスはローラーダッシュで一気に進む。

ミサイルの直撃などはデイストーション・フィールドを全開にしておけば防げるので無視する。

「てえい！」

そして岸壁から勢いをつけてジャンプと同時に、地上戦フレームにあるスラスターを全開にしてジャンプした。

「おお、残ってるのひょつとしてあれだけか？」

離れて見たバツタ達の数を確認して、アキトは思わずガッツポーズをつけた。

「んじゃ、任せたぜーつと。」

想定位置にスラスターをふかしてゆつくりと降下するアキトのエステバリスに、ナデシコとの通信が開いた。

「おう、任された！」

コウスケの声と一緒に、白い船体が海から急速上昇してくる。
エステバリスを回収する為に、直上のデイストーション・フィールド

ドは解除されているらしく、アキトはナデシコのブリッジの上に降り立つ。

「グラビティブラスト、撃てい！」

「グラビティブラスト発射。」

コウスケの号令とともにナデシコからグラビティブラストが発射され、残ったバツタを殲滅したのだった。

「た〜まや〜！」

「かーぎやー！」

ミナトとメグミはその爆発を見て、歓声を上げている。

「俺の予想では、もうちつと派手な花火になる筈だったんだがなあ。」

「

コウスケは少し不満そうに愚痴っている。

「ざま〜みる。」

それを見たアキトは、ニヤリと笑う。

「ケツ、せっかく助けてやったのに、お礼の言葉がそれかよ。」

「助けて貰った覚えは無いなあ…でも、楽させて貰った事には感謝する。」

そう言つて、二人の男は睨み合いながらニヤリと笑みを交わすのだった。

「やあやあアキト君、ご苦労!」

「なんだか随分と偉そうだな、アカネ…。」

出迎えたアカネにナデシコに帰投したアキトは、ゲンナリとした表情を浮かべた。

「あはは、でもホントに強いんだねアキト。

暑苦しい人が感心してたよ?」

「いい加減ガイって呼んでやれよ、可哀想だから。」

アキトはそう言うが、アカネは流す気満々だった。

「名は体を表すって言っじゃない?

わかりやすいのが一番!」

アカネはガイへの呼び方を変える気は全くないようだ。

「ところでコウスケは?

帰ったら、一発殴る予定だったんだが。」

最初に言つた事は忘れないアキトである。

まあ、殴るつもりはないのだが。

「コウ兄ちゃん？」

私もジュン姉ちゃんも一緒に行こうって言ったんだけど、『男をわざわざ労いに行くわけねえじゃねーか、気持ち悪い』って言って、ブリッジに居るよ。」

「あやつは…。」

アキトは呆れた表情を浮かべるが、特に咎める気分は湧かない。元の世界ではユリカが来て非常に騒がしかった格納庫には、まったくとした空気が流れていた。

「ごめんなさい。」

本当は、艦長が労うべきなんだろうけど。

お疲れ様でした、テンカワさん。」

「え？はあ、どうもツス。」

ぺこりと頭を下げるジュンに、アキトは頬をポリポリと掻きながら返礼した。

「む？ジュン姉ちゃん苦手なの、アキト？」

アカネはアキトの様子が変なのに気付いて、目ざとく聞き返してきた。

「いや、そうじゃ無いんだけど。
なんか落ち着かなくてね。」

ユリカというよりはコウイチロウを若くしたようなコウスケとは普通に話せるが、よく見なくてもあっちの世界のジュンを彷彿とさせる容姿のこちらの世界のジュンを見ると、なんだか気分が落ち着かなくなるアキトだった。

何と言うか、男のジュンが化粧して女装しているように見えて、居た堪れない気分になるのだ。

「え、えつと、私の事、苦手？」

「いやいや、ちょっとした違和感なんであんまり気にしないでください。」

おずおずと上目づかいで聞き返してくるジュンに、アキトは慌てて弁解する。

「は、はーん…駄目だよアキト、ジュン姉ちゃんにはコウ兄ちゃんが居るんだから。」

「はい!？」

ニヤリと笑って、アカネはアキトを見た。

「ええっ!？」

アカネの言葉を聞いて、ジュンの顔が真っ赤になる。

「ええと、ごめんなさい?」

「何かフられた!？」

だから、そういうんじゃないですって!」

流石のアキトも焦ってオタオタし始め、それを見てアカネはニヤついている。

「フフフフ、ラブには刺激が必要だぜイ。」

焦るアキトを見て、良い玩具になるんじゃないかね？とか思うアカネなのだった。

第05話 いたってシンプルな作戦（後書き）

アニメ版1話完結まであと二話かと思ったら、一話だった。
まあ、ほぼ二話分のボリュームになったし、別にいいよね？

そんなわけで一段落。

理想郷の方のSSに取り掛かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3090r/>

三千世界の女神

2011年5月7日23時46分発行